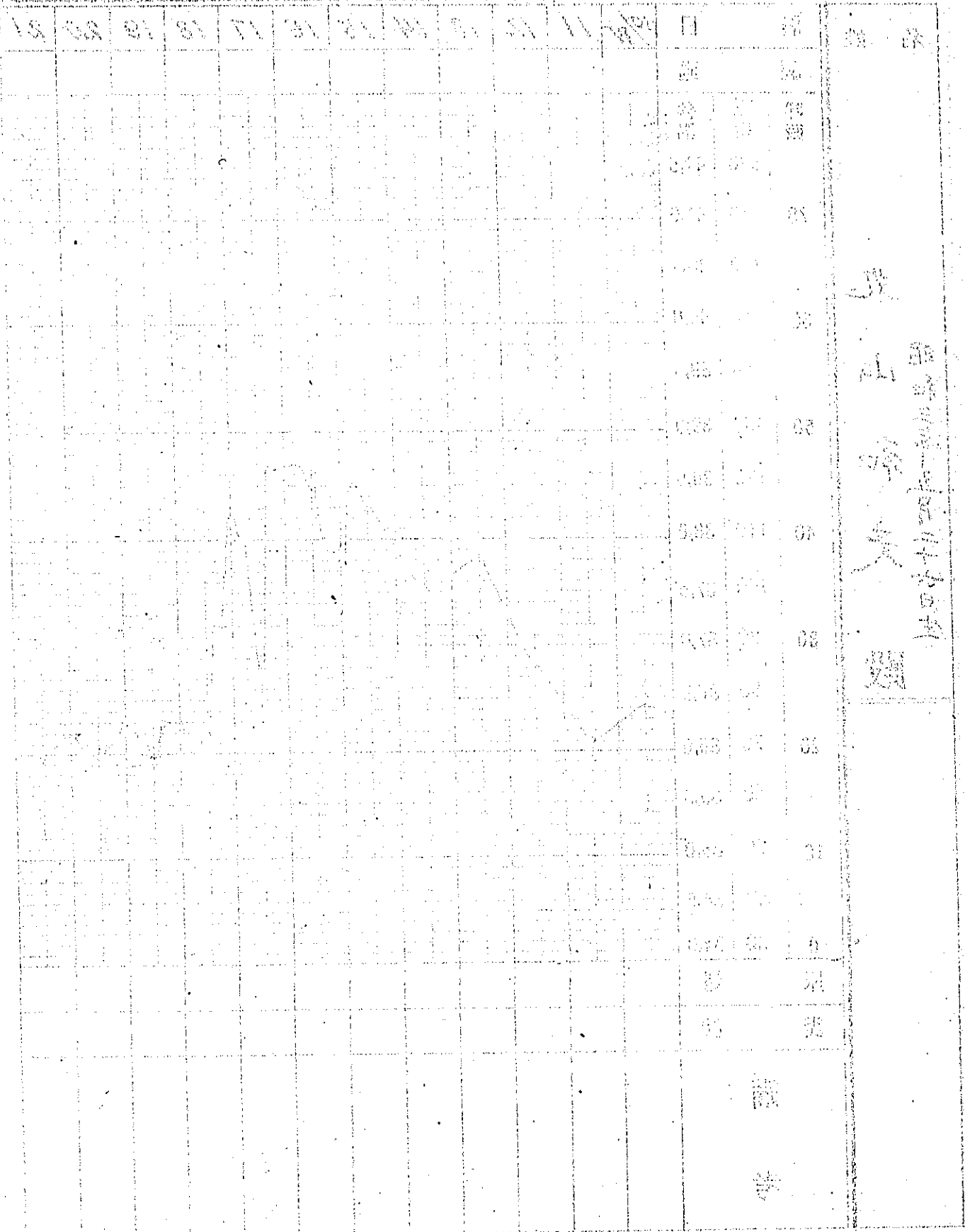


名 姓

小坂昇二殿

昭和三年四月二十九日生

曆日	10/IV	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21
經 過												
呼吸												
脈 搏	180	170	160	150	140	130	120	110	100	90	80	70
体 温	41,5	41,0	40,5	40,0	39,5	39,0	38,5	38,0	37,5	37,0	36,5	36,0
尿 量												
糞 便												
備 考												

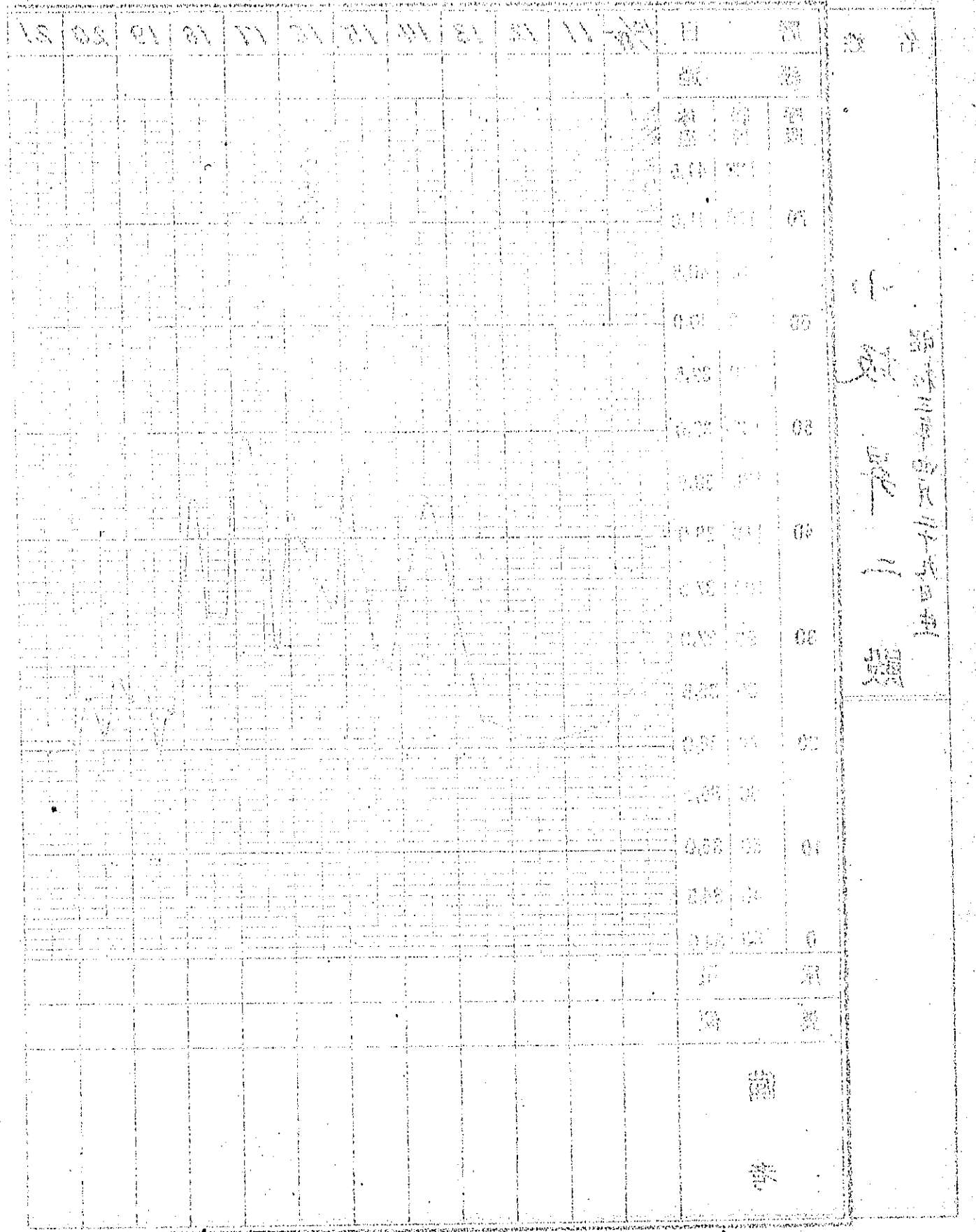
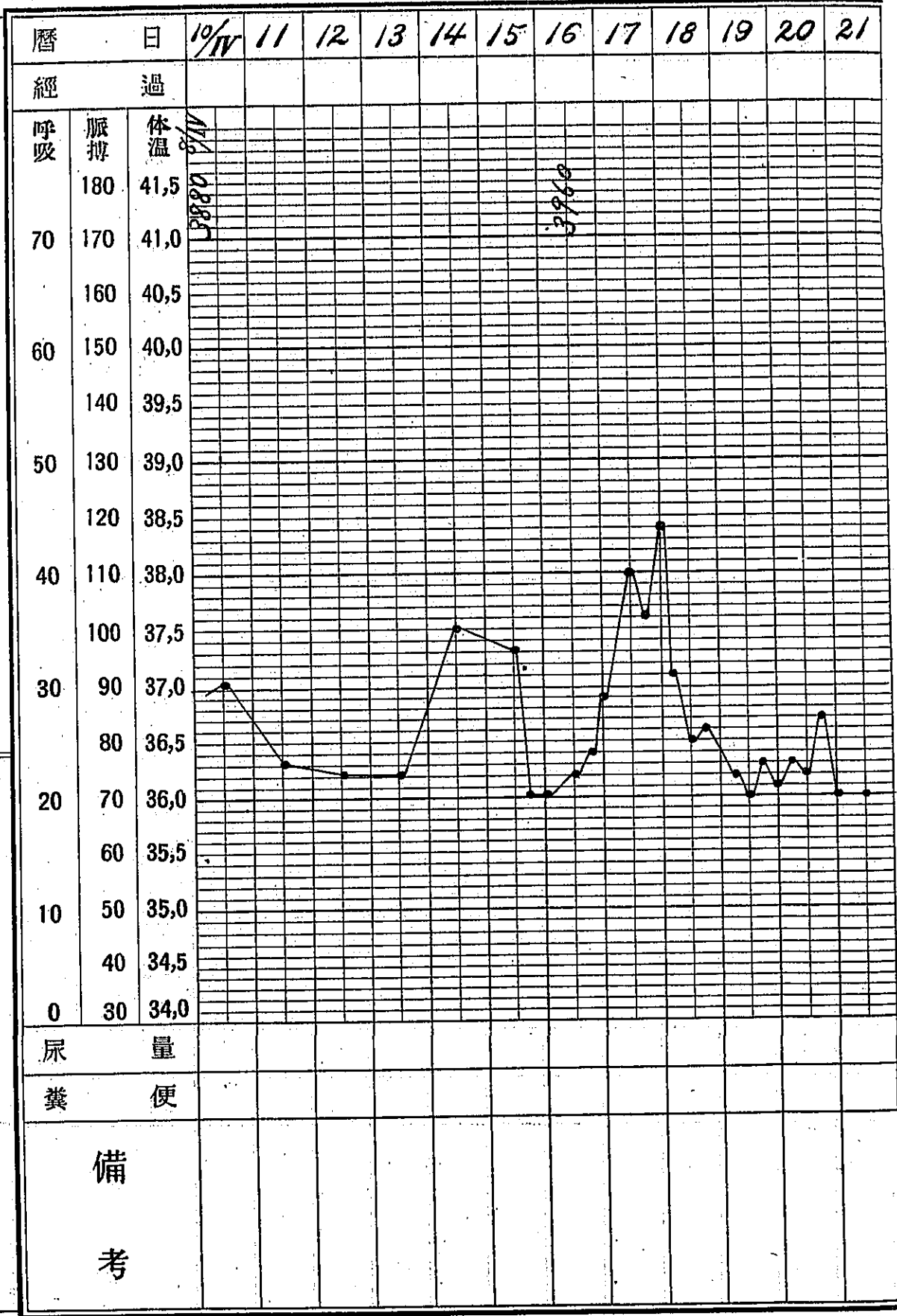


昭和三年四月二十九日生

名 姓

昭和三年十一月八日生

根本久二殿

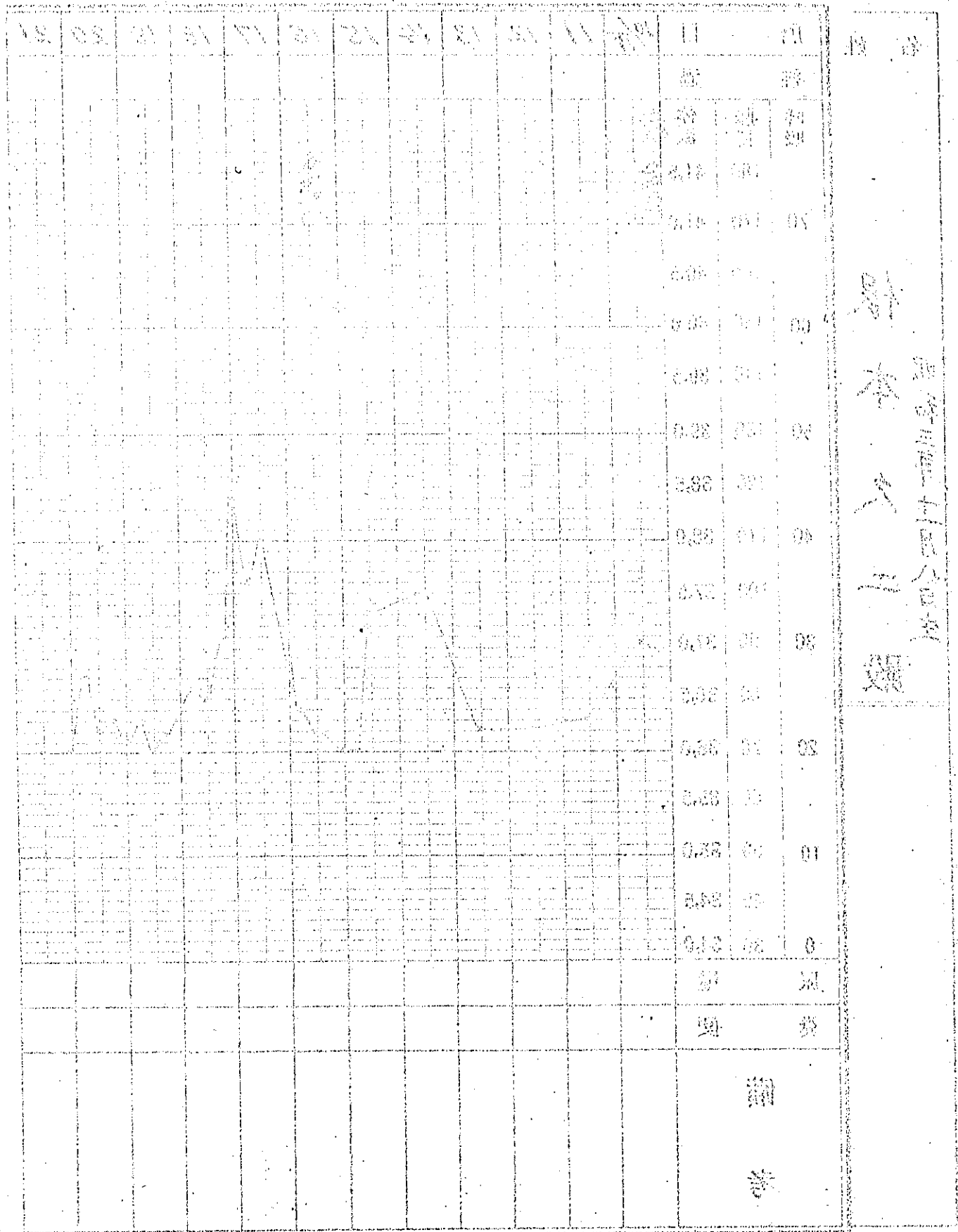
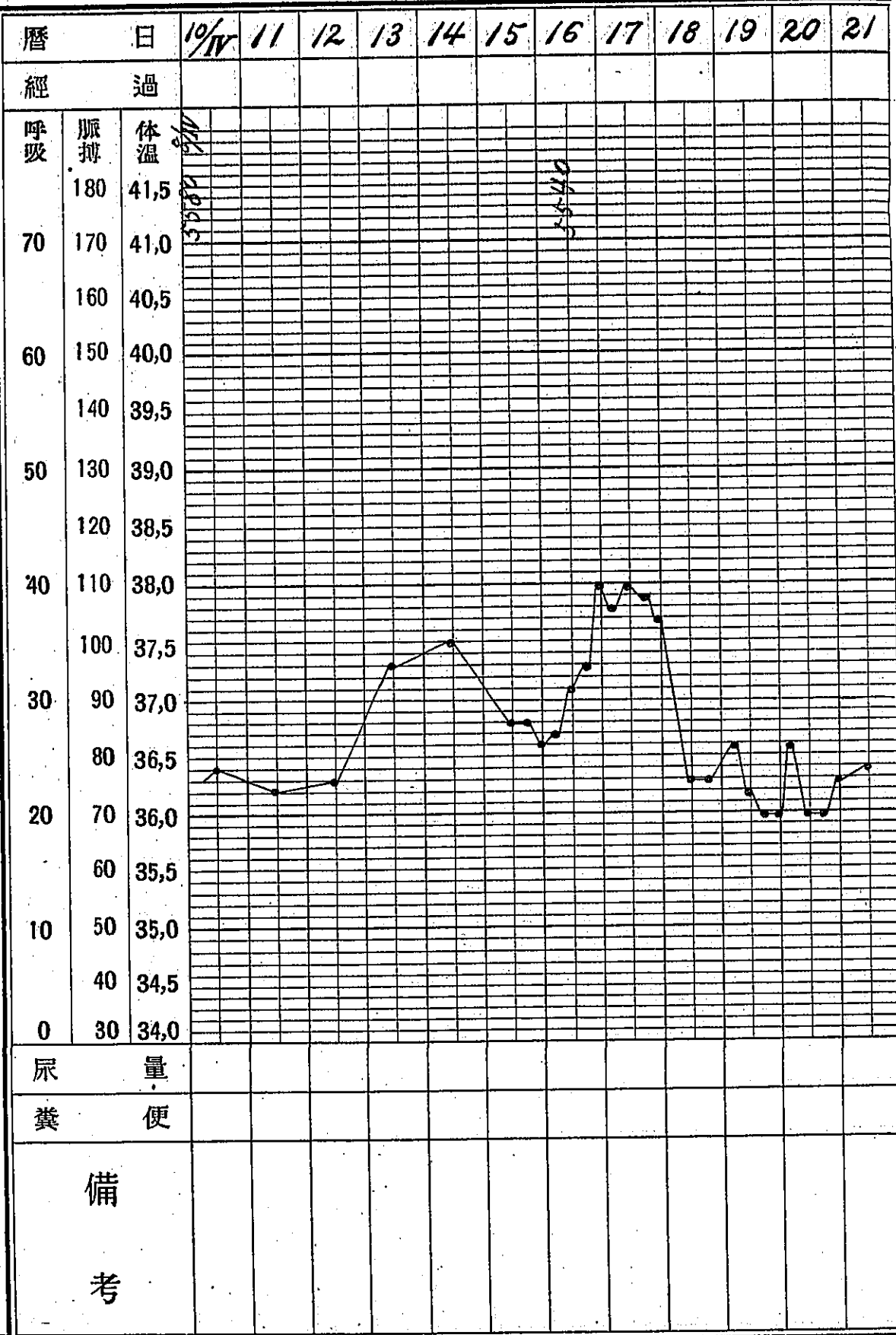


昭和三年十一月八日生
根本久二殿

名 姓

中島美代殿

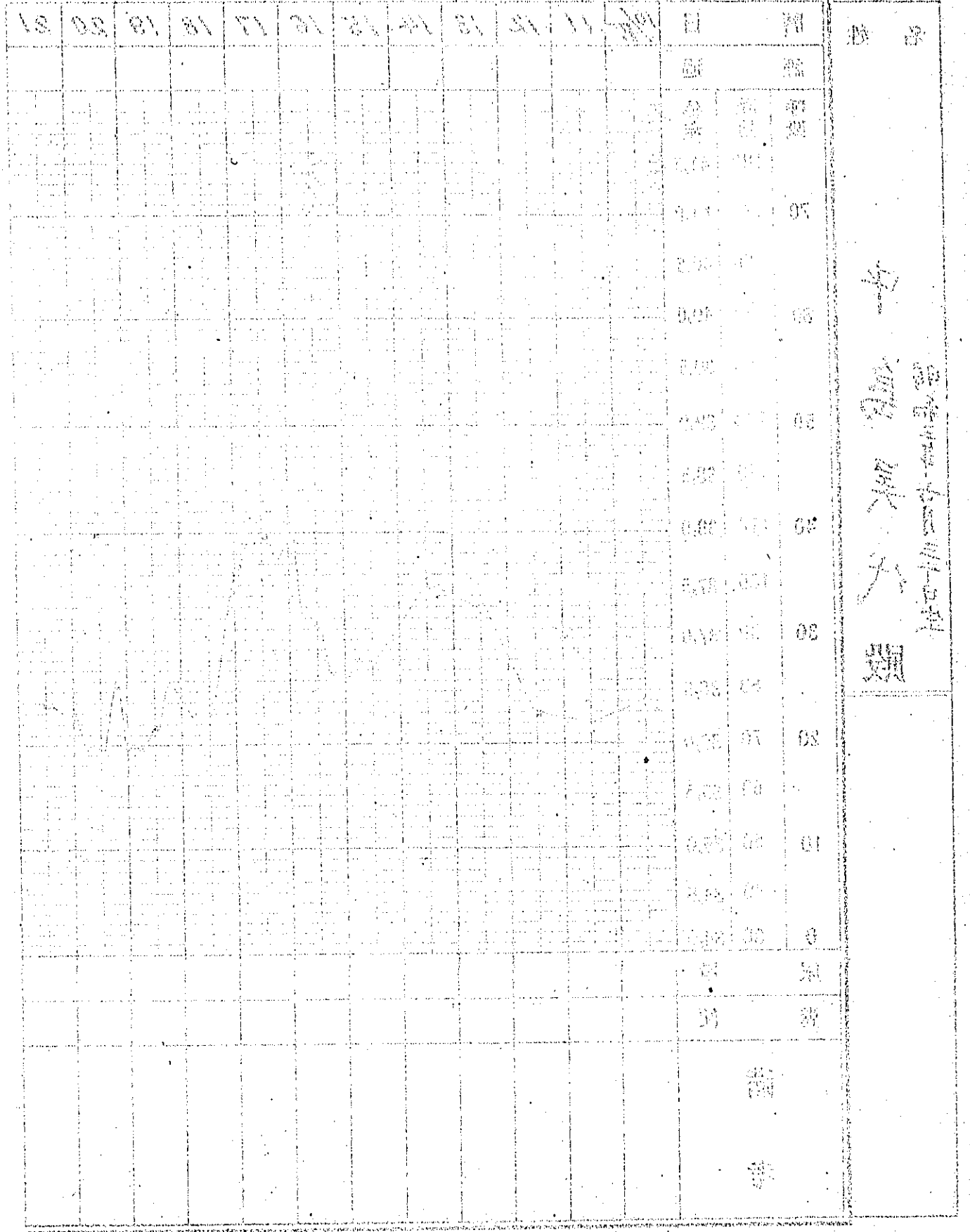
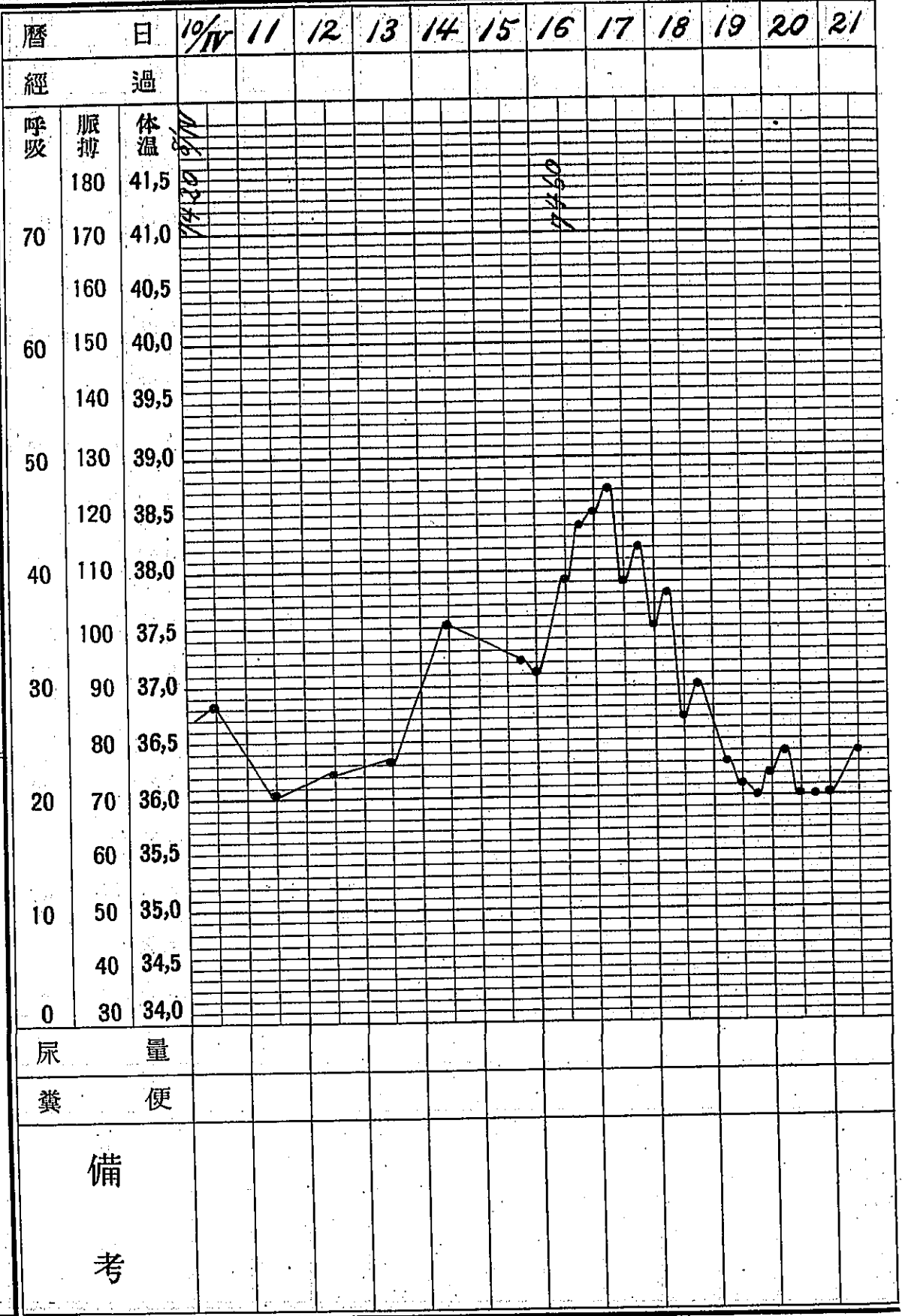
昭和三年六月三十日生



昭和三年六月三十日生

姓名

王成駒殿
昭和三年七月十六日生



昭和三年七月十六日生

名 姓

曆 日 10/IV 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21

經 過

呼吸 脈搏 体温

180 41,5

70 170 41,0

60 160 40,5

50 150 40,0

40 140 39,5

30 130 39,0

20 120 38,5

10 110 38,0

0 100 37,5

80 36,5

70 36,0

60 35,5

50 35,0

40 34,5

30 34,0

尿 量

糞 便

備

考

瀨

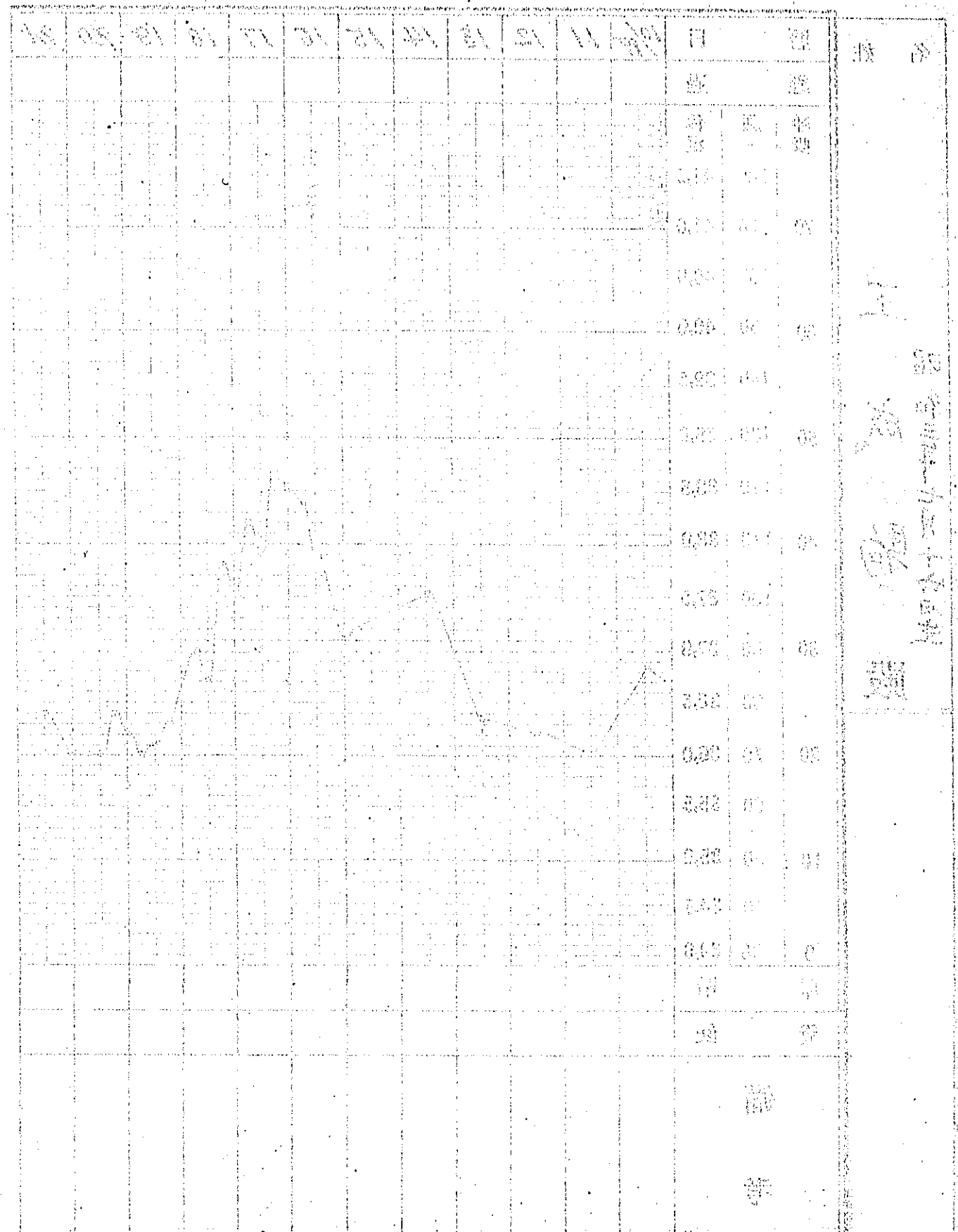
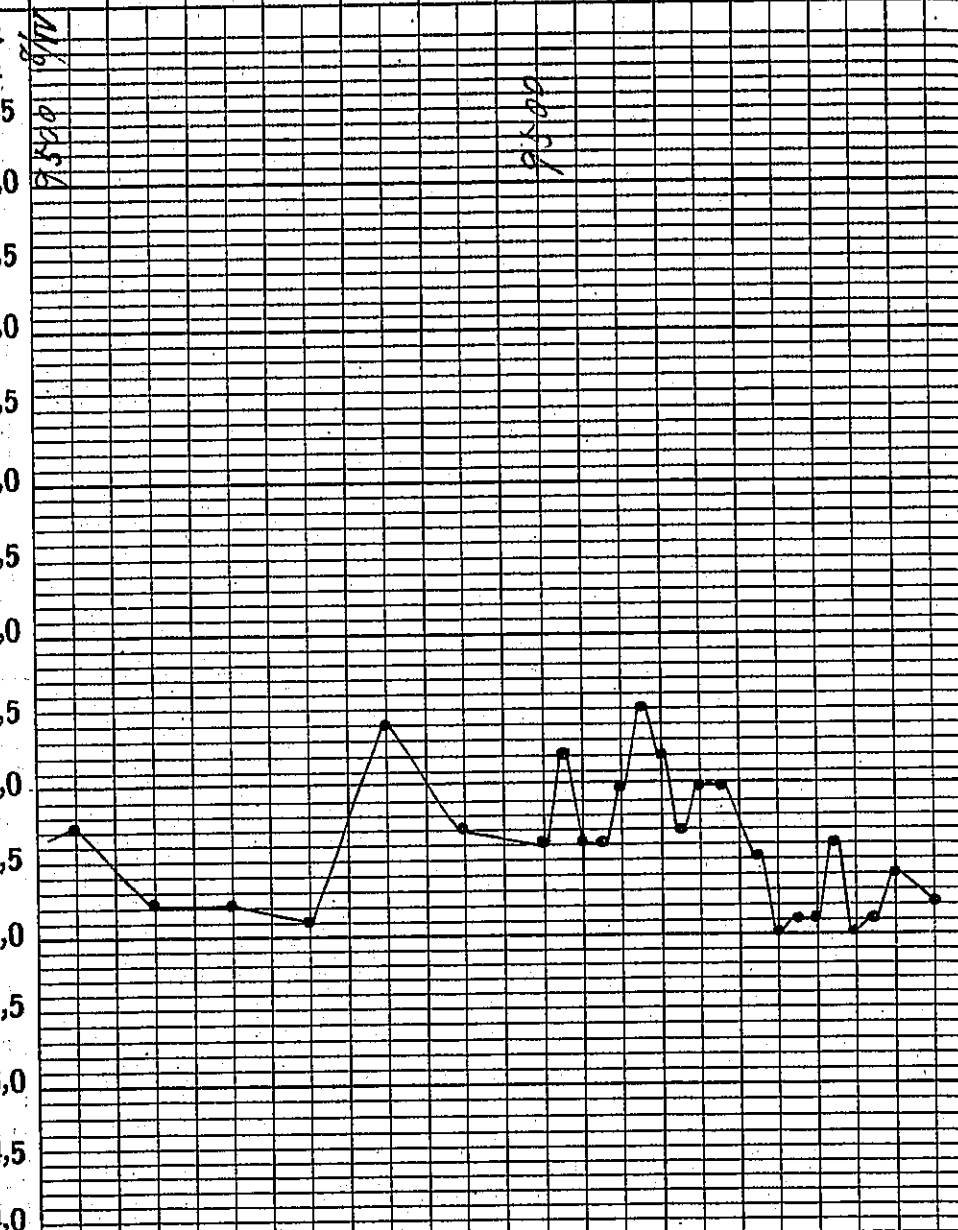
下

敏

子

殿

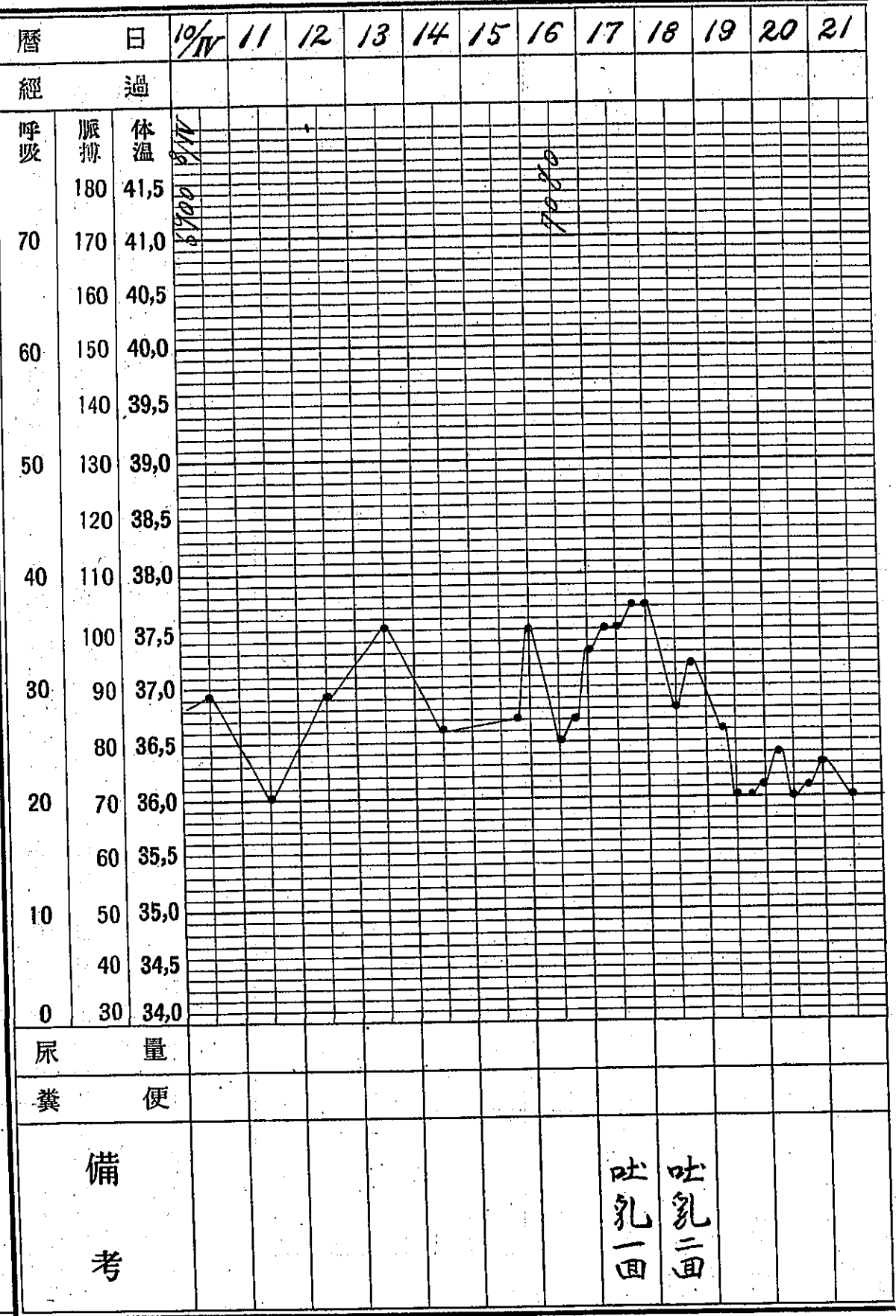
昭和五年一月百生



瀨下敏子殿

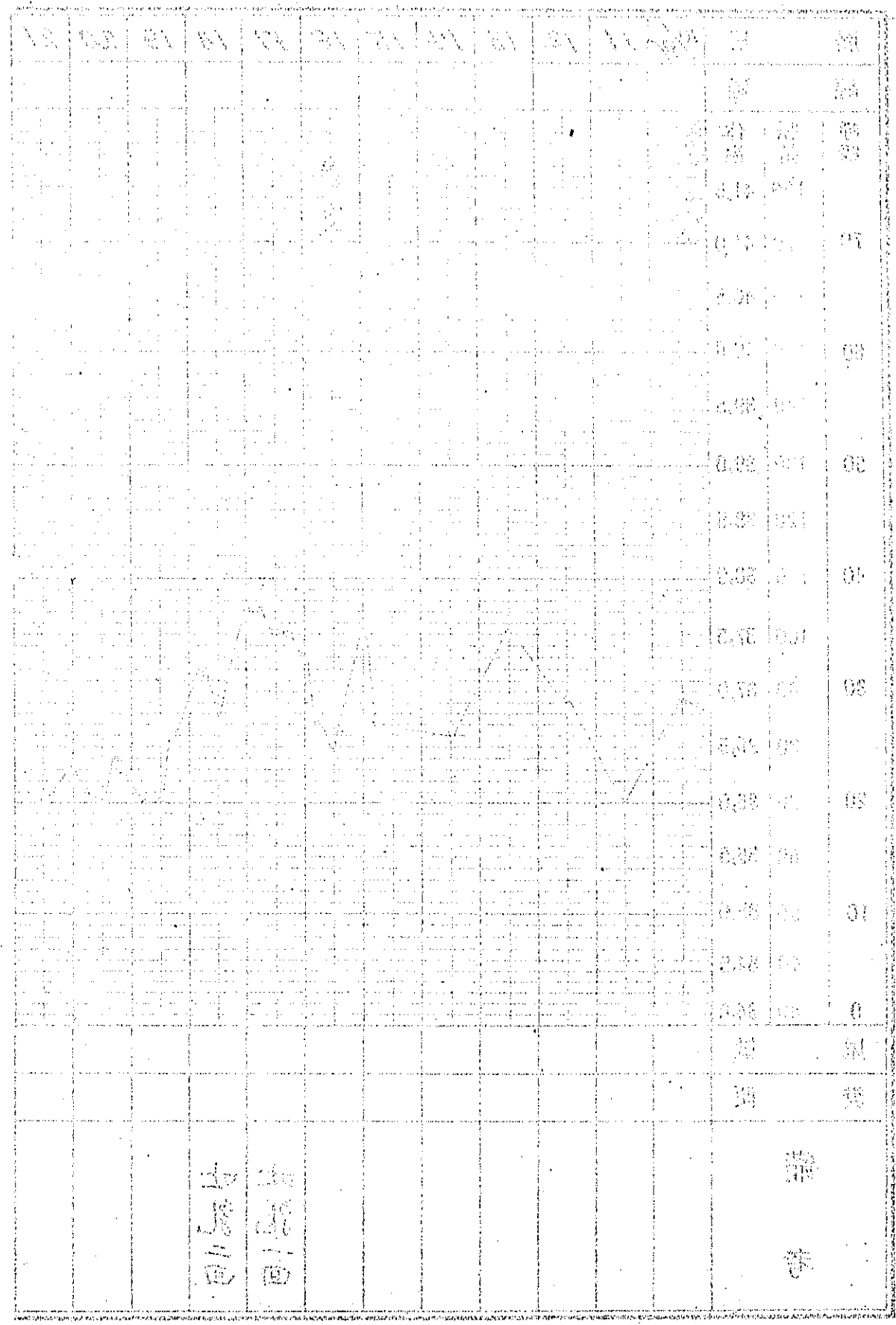
名 姓

尾崎利得子殿
昭和三年八月二十日生



昭和三年八月二十日生

昭和十一年四月五日



二脈搏其ノ他

脈搏ハ體温ノ上昇ト共ニ頻數トナルヲ常トス其ノ他熱ノ最高期ニ於ケルニ般症狀トシテハ食思減退ヲ來シ又神經過敏トナリ不眠症ニ陥ルヲ主トス成人ニアリテハ頭痛疲勞ヲ感ジ又屢々嘔氣ヲ訴フルコトアリ但シ體重便ノ性状及量等ハ種痘ノ爲ニ大ナル影響ヲ蒙ラザルヲ常トス。

予ハ前項記載ノ如ク東京市築地産院附屬育兒院ニ於テ初種痘ヲ爲シタル際ニ種痘後第七日ニ於テ體重ヲ測定シ種痘前二日ノ體重ト比較シタルニ左表ノ如キ成績ヲ得タリキ。

計	二	八	四	二	增加シタルモノノ員數	増減ナキモノノ員數	減少シタルモノノ員數
計	〇	〇	〇	〇			
四	〇	〇	〇	〇	一	二	一
三	〇	〇	〇	〇			
三	〇	〇	〇	〇			

備考 二二〇五ヲ減少シタルハ體温三十九度ニ上昇シタル者ナリ

以上ノ成績ヲ西川氏ガ嬰兒ニ施シタル際ノ體重減少ニ比較スルニ甚シク不良ナルガ如ク體重ノ關係ニ於テモ幼兒ハ嬰兒ヨリモ種痘ニ對シ不良ノ影響ヲ受クルコト大ナルモノノ如シ。

白血球ノ變化ニ就テハソボトカ氏ノ研究ニ依レバ始メ白血球増加症ヲ見特ニ第三乃至第四日ニ認めラルルコト多シ而シテ此白血球增多ハ三乃至四日間持續スルモ第七八日ノ頃ヨリ漸次減少シ始メ三乃至五日間ハ却テ白血球減少症ヲ示ス然ルニ接種後第十乃至第十二日ニ至レバ再び增多ヲ認め三乃

至六日間持續ス、而シテ前記第一次ノ白血球增多ノ場合ニハ一萬二千乃至二萬三千ノ間ニアルモ第二次ノ增多症ニハ一萬乃至一萬七千ヲ數フト云ヘリ。

【異常經過】

種痘ハ前述ノ正常經過ノ他ニ屢々異常ノ經過ヲ取ルモノアリ、氣温高キトキ例之夏季ナルカ又ハ冬季加熱セラレタル室内ニアリテ特ニ強健ナル小兒ニ在リテハ痘疱形成機轉普通ヨリモ一二日早ク現ハレ、之ト反對ノ場合ニ於テハ之ニ反スル結果ヲ見ルコトアリ、又痘苗ヲ甚シク稀釋シタルトキニ於テモ痘疱形成ハ遲延スルモノトス。

潜伏期モ亦四五日乃至七日ニ及ブコトアリ、又時々一個若ハ二個ノ膿疱ニ限り其ノ發生ハ他ノ症狀ガ總テ正常ナル經過ヲ取レルニ拘ラズ、潜伏期ノ延長ヲ見ルコトナリ。

此際興味アルハ遲發痘疱ノ發育ガ他ノモノニ依リ促進セララル場合アルコトナリ、是等時機ヲ異ニシテ發育セル痘疱ニ於テモ「アレオーラー」形成ノ最頂點ハ同時ナルヲ普通ナリトス。

斯ル遲發痘疱即チ「ビルクレー」氏ノ所謂「Schlafende Keime」ガ入浴又ハ混合感染ニ依リテ其ノ發育促進セララルコトアリ。

稀有ナル例トシテ「痘疱再發」ナルモノアリ、メーデル「Meder」氏ハ其ノ二例ヲ報告セルガ、其ノ一例ニアリテハ種痘後三十三日、第二例ニアリテハ四十四日後ニ痘疱ノ癢痕上ニ新シキ膿疱ヲ形成シ「フオクト」Virgoff「フロツチ」E. Prosz 氏等モ同様ノモノヲ實驗セリト云フ。

高度ノ貧血兒ニアリテハ種痘ノ經過多少異ナル場合アリ、例之「アレオーラー」ノ形成ハ極メテ微弱ニシテ屢々第十日乃至第十二日頃ニ其ノ痕跡ヲ認ムルカ、若ハ全然之ヲ缺カスルコトアリ、惡液反應反之丘疹ハ通常以上ニ發育スルコト多シ、是等ノ小兒ニアリテハ「アレオーラー」形成微弱ナル爲、熱モ微弱ナル

カ或ハ全ク缺如ス。

種痘經過中ニ蛋白尿ヲ見ルコトハ極メテ稀ナリ、又縦合之ヲ見ルコトアルモ通常熱性蛋白尿ト考フベキモノトス、次ニ種痘ニ基ク腎臟炎ノ發生ハ之ヲ認ムルコトナシ。

第二節 再種痘

初種痘ニ於ケル種痘經過ハ定型的ニシテ規則正シキヲ常トスルモ、再種痘ニアリテハ症狀極メテ多種多様ナルヲ特徴トス、一般ニ特異性反應ハ再種痘ニアリテハ早期ニ現ハレ、其ノ度輕微ナリ、第一期種痘ヨリ第二期種痘迄ノ間隔ガ大ナル程、種痘經過ハ第一期種痘ノ症狀ニ接近シ、兩者ノ期間ノ小ナル程反應時期ハ短縮シ、特異性變化モ亦輕微ナリ、接種部位モ個々不同ヲ示スコト多ク、經過ノ時期、程度等モ凡ユル階梯ヲ示スモノトス、再種痘成績モ亦第一期種痘ノ際ノ癢痕ノ數及大サニ關係アリ、即チ第一期種痘ノ癢痕ガ少數ニシテ、而モ明瞭ナラザルモノニアリテハ第二期種痘ガ第一期種痘ニ於ケル如キ發育ヲ呈シ、反之第一期種痘ノ癢痕著明且ツ多數ナルモノニアリテハ第二期種痘ハ極メテ早期ニシテ輕微ナル經過ヲ取ルヲ常トス、斯ノ如ク何レノ場合ニアリテモ第一期種痘ノ影響ハ著明ナルモノニシテ、而モ高齡ニ達スル迄其ノ影響ヲ認ムルモノナリ、人體ハ種痘ニ依リ一定ノ變化ヲ受ケ、第二回接種ニ際シ「アルレルギー」性ノ反應ヲ示スニ至ルベシ、夙ニ「ビルクレー」氏ノ唱道セル所ニシテ同氏ニ從ヘバ再種痘ノ結果ハ、
一、多量ニ殘存スル免疫物質ノ爲ニ病原ノ死滅ヲ來スモノニシテ、結節、丘疹、早期ニ乾燥スル水泡及「アレオーラー」形成ナキ微弱ナル早期反應ヲ呈スルニ過ギズ。
二、免疫物質ノ減少、若クハ缺カセルモノニシテ病原體ハ接種部位ニ發育増加シテ膿疱ヲ形成シ、「アレオー

「チ」形成ノ促進サルルモノニ分ツベシ。

後者ニアリテハ全身ハ第二回接種ニ依リ再ビ自働免疫ヲ得之ニ屬スルモノノミ血液内ニ補體結合性抗體ノ發現ヲ見ルト云フ。

第一ニ屬スルモノハユルゲンズ Jürgens 氏ノ考フル如ク免疫反應ト認ムベキモノニシテ第二ニ屬スルモノハ免疫反應ノ關與スル所ハ唯第一回接種ノ多少ノ影響ヲ認メ得ル點ノミトス。

再種痘ガ何等臨床的所見ナク經過スルガ如キハ初種痘善感後極メテ短時日ノ間ニ再種痘ヲ行ヒタルトキニ限り見ルコトニシテ再種痘ガ既ニ數ヶ月經過後ニ行ハレタル場合ニ於テハ一定ノ反應ヲ示スヲ普通トス即チ發赤腫脹小結節形成等ヲ呈シ是等ノ臨床所見ハ免疫物質ノ更新及形成ト竝行スルモノナリ。

ボーン Rein 氏ハ再種痘ノ經過ヲ略々次ノ如ク細別セリ

(1) 所謂完全善感ニシテ初種痘善感ノ場合ニ類似シ六〇乃至七〇時間ノ潜伏期ノ後切線上ニ紅色小結節ヲ生ジ翌日漿液性痘疱トナリ第七日迄次第ニ増大ス通常第三日乃至第五日ニ甚シキ搔痒感アリ第六日以後腋窩腺ノ腫脹ヲ認ム第七日乃至第八日ニ著明ニシテ初種痘ニ於ケルヨリモ却テ強キアレオラー「ラ」呈ス其ノ「アレオラー」ハ時トシテハ前膊ニ及ブコトアリ痘疱ハ週クモ第九日ニハ乾燥及痂皮形成ヲ始ム。

此際被接種者ノ自覺症狀著明ナルコトアリ體温ハ屢々初種痘ノ際ニ於ケルガ如ク上昇ス併シ全身症狀ノ恢復極メテ迅速ナリ痂皮ハ長ク殘存スルコトアルモ癩痕ハ表在性ニシテ多クノ場合消失ス。(2) 檢診日ニハ接種ノ一部若ハ全部ニ發痘ヲ見ルモ痘疱ノ發育極期ヲ約二十四時間前ニ經過セルニ拘ラズ創傷反應尙著明ニシテ直ニ特異反應ニ移行スル傾向アリ痘疱ノ發育經過ハ短縮シ水疱性丘疹

ハ一般ニ小サク餘リ多房性ナラズ善感セル接種ハ「アレア」ニ圍繞セラレ内容ノ乾燥ト共ニ速ニ痂皮ヲ形成シ極メテ輕度ノ癩痕ヲ貽ス是等ニ於テハ搔痒感ノ現ハルルコト早期ナレバ從テ局所變化輕微ナリ腋窩腺腫脹ハ殆ト毎常之ヲ認ム極期ニアリテハ一二日輕微ノ發熱ヲ見ルコトアルモ全身症狀著明ナラズ痘疱内容ハ感染力ヲ保有ス。

(3) 所謂中等度善感ニシテ二四乃至三〇時間ノ潜伏期ヲ特徵トシ第三日ニ於テハ既ニ夫レ以前ニ搔痒及結節形成ヲ經過シ水疱ニ移行シ發育極期ハ第四日ニアリ臍部ヲ形成スルコトアルモ亦之レ無キコトモアリ「アレア」ハ第五日頃著明ナリ腋窩ノ疼痛ヲ覺ユルモ腺ノ腫脹ハ著シカラズ全身症狀モ顯著ナラズ水疱内容ハ病原性ヲ示サズ體温ハ上昇セズ檢診日ニハ接種部ハ小痂皮ヲ以テ被ハレ痂皮ハ間モ無ク脱落シ僅ニ癩痕ヲ認メシム。

(4) 所謂不完全善感ニシテ特徵ハ既ニ第一日ニ接種部ニ強度ノ搔痒感アリ第二日若ハ第三日ニハ小結節ヲ形成シ數日ニシテ小水疱ニ變ジ其ノ内容ハ速ニ潤濁ス「アレア」ハ極メテ狭小ナリ腋窩腺ノ壓痛モ亦極メテ輕微ナリ第四日ニハ小痂皮ヲ認メ之ニ依リ漿液滲出ノ存シタルコトヲ認メシム。

(5) 所謂最低善感ニシテ再種痘後一時間ニシテ接種部ニ丘疹ト云フヨリハ寧ロ隆起ヲ生ズ搔痒感著シ此輕微ノ發赤ハ二十四時間後ニ既ニ消退ス。

(6) 不善感ニシテ接種切創ハ速ニ治癒シ檢診日ニハ辛ウジテ認メ得ルカ又ハ扁平若ハ結節樣ノ小隆起ヲ留ムルノミニシテ搔痒及炎症ノ微ナジ。

我國ニ於テハ再種痘ノ經過ニ就キ種痘施術心得ニ指示スルトコロアルモ簡ニ過グルヲ以テ之ニ據リテハ實際家ガ統一セル檢診結果ヲ得難キ觀アリ予ハ多數經驗家ノ意見ニ從ヒ再種痘ノ症狀ヲ次ノ如ク區分セムトス。

- 一、接種後創傷反應ノミニテ終ルモノ。
- 二、接種後多クハ二十四時間以内ニ接種部ニ發赤、丘疹及浸潤ヲ來シ煩ハシキ搔痒アリ、尙小水疱ヲ生ズルコトアリ、而シテ斯ノ如キ局處反應「アレルギー」反應ハ通常三乃至六日ニシテ消失スルモノトス。
- 三、接種後第二日ニ於テ多クハ「アレルギー」反應ヲ呈シ、同時ニ接種部ニ丘疹、發赤及浸潤アリ、丘疹ハ更ニ進ンデ水疱トナルコトアルモ膿疱ヲ形成スルコトナク、第八日目前後ニ於テ浸潤ヲ伴フ結節又ハ丘疹ヲ形成シ、尙之ニ「アレルギー」見ルコトアリ、結節又ハ丘疹ハ後ニ結痂脱落シ輕度ノ癢痕ヲ貽スコトアリ。
- 四、初種痘善感ノ場合ト同様ナルカ、又ハ前項ト同様ナル症狀ヲ以テ始マリ水疱ヲ形成シ水疱ハ更ニ膿疱ニ移行スルモノ、膿疱ハ通常初種痘ニ於ケル如ク大ナラズ、經過モ亦促進ス。

第三節 種痘ノ異常經過

種痘ノ異常經過ハ凡ソ二種ニ區別スルコトヲ得ベシ、

- 一、ハ痘苗接種ニ依リ、直接ニ起ル所ノ種々ノ症狀ニシテ、之ニハ種痘後發多形疹アリ、又血行及淋巴行ニ依リ病毒ガ蔓延スルモノト解セラルル種痘性發疹即チ副痘疹及汎發性種痘疹アリ、
- 二、ハ種痘後形成セル痘疱内容ヲ二次的ニ他部ニ移植スルコトニ依リ陰部及眼等ニ發痘ヲ來スモノニシテ、彼ノ濕疹ノ上ニ痘毒ヲ移植スルコトニ依リテ生ズル發疹モ亦之ニ屬ス、

(1) 種痘後發多形疹 (Polymorphe postvaccinale Exantheme)

非常ニ興味アル一ノ異常經過ニシテ、其ノ原因ハ不明ナリ、接種後八日乃至十一日ニシテ先ヅ顔面次デ軀幹及四肢皮膚ニ蓄薇疹樣、麻疹樣丘疹樣或ハ尋麻疹樣ノ發疹ヲ生ズ、又二三ノ部位、例之上肢ノ屈側等ニハ疎發シ半「レンズ」大ノ蓄薇色ノ紅斑ヲ生ジ麻疹樣ノ症狀ヲ有スルモ相癒合セズ、他ノ部位、例之顔面

及背部等ニ於テハ紅斑ハ稍隆起ス、時トシテ直徑一乃至二種ニ達シ、相癒合スルコトアリ、始メニハ蓄薇紅色ナルモ、次第ニ赤褐色ニ移行シ、間モナク褐色シ暫時ハ輕度ノ色素沈着ヲ貽ス、之ハ屢々麻疹又ハ風疹ト誤タルルコトアルモ、風疹ト異ルハ頸部淋巴腺ノ腫脹ナキコトニシテ、麻疹トノ鑑別ハコブリツク氏斑及氣管支炎、結膜炎等ナク、且落屑ナキヲ以テスベシ、其ノ他時トシテ、亦紅斑ヲ生ズルコトアリ、テ多形性滲出性紅疹ニ似タルコトアリ、其ノ發生當初ハ普通ノ丘疹性紅疹ニ類スルモ、紅斑ト異ナルハ個々分離セズ又一過性ニモアラズシテ小結節ヨリ次第ニ紅斑ニ進行ス殊ニ其ノ發疹相互ノ間ニ健康皮膚ノ存スルヲ特異トス此發疹ノ原因ハ不明ナルモ多クノ場合ハ皮膚ノ非常ニ敏感ナル小兒ニ於テ屢々見ラルル所ニシテ而モ通常盛夏ノ候ニ於テ遭遇スルヲ常トス、但其ノ豫後ハ常ニ佳良ナルモノナリ、二三ノ學者ハ此發疹ヲ天然痘ニ於ケル前驅疹ト同一ノ意味ノモノト解釋セリ、

ビルケー氏ニ依レバ斯ノ如キ定型ノ時期及性質ヲ有シ弱毒性痘疹ニ類スル經過ヲトルモノハ總テ特異性種痘疹ト解スベキモノナリト云フ、此發疹ハ非常ニ高度ニ膿疱ヲ形成シ、大ナル「アレルギー」ヲ有スル完全善感ノモノニモ、極メテ輕度ニ善感セルモノニモ同様ニ來リ得ルコトハ興味アル事實ナリ、前者ノ場合ニハ天然痘前驅疹ト同一ノ意味ノモノニシテ、後者ノ場合ニハ病原體ガ血行ニ入り免疫尙不完全ナル皮膚ニ到達シテ發スルモノト解釋セラル。

(2) 副痘疹偶發性種痘疹 (Nebenvakzinen, akzessorische oder akzidentelle Vakzinen)

本症ハ甚ダ稀ナルモノニアラズ、常ニ種痘部位ノ附近ニ發シ、其ノ發育ハ多クノ場合不全經過ヲ取ルヲ常トシ、一般ニ小ニシテ丘疹以上ニ達スルコトナシ但シ極メテ稀ニハ水疱期ニ達シ小量ニ圍繞セラルルコトアリ、而シテ之ガ發生ハ病原ガ淋巴道ニ依リテ附近ニ移行シ局所性ノ發疹ヲ來スモノナルベシト云フ、其ノ不全經過ヲトルハ受痘者ガ此副痘疹ノ發生時期ニハ一定度ノ免疫ヲ有スル爲ニ完全ナル

發痘ノ阻止セララルモノト説明セラル。

(3) 汎發性種痘疹 (Vaccine Generalisata)

前者ヨリモ遙ニ稀ナリ、牛痘毒ガ血行ニ依リ全身的ニ分佈スル結果發シ來ル膿疱性發疹ナリ、接種後第九乃至第十二日ニ於テ種痘熱ノ既ニ下降セル後ニ全身的發疹トシテ出現ス、膿疱ヲ形成スルモノニシテ癩痕ヲ造ラズ治癒ス、時ニハ部分的ニ來ルコトアルモ亦全身ニ發生スルコトアリ、又口腔粘膜ニモ之ヲ見ルコトアリ、シャリポー Chalybeus 氏ハ此發痘内容ヲ採リテ他ニ接種シ能ク善感セシメ得タル例ヲ報セルモ、每常然ルモノニアラズ、シヨールポー Chauveau 氏ハ六十萬人ノ被接種者中本症ヲ呈シタルモノ六乃至八例ヲ見タリト報ジ、フオクト Vost 氏ハハンプルヒノ種痘所ニ於ケル四十二年ノ經驗ニ一例モ見ザリシト云ヒ、又ヨッフホマン Jochnann 氏ハ三十年間ニ於テ唯一例ヲ見タリト云フ、而シテ此一例ハ初種痘ノ男兒ニシテ僅ニ一個ノ膿疱ヲ發生セルモノナリシガ接種後第十日ニ先ヅ發痘部位ノ周圍ニ發疹ヲ見、其ノ後直ニ全身ニ無數ノ發痘ヲ作リタリト云フ、氏ハ遺憾ナガラ痘疱ガ乾燥シ始メタル後ニ見タルモノニシテ實驗的ニグワルニエリー氏小體ヲ證明シ能ハザリシモ、臨床的ニハ確實ナル本症ナリシト認メタリ、此例ニ於テ唯一個ノ膿疱ニ續發セルコトハ非常ニ興味アル點ナルガ蓋シ皮膚免疫ガ尙不完全ナリシ爲ナラン。

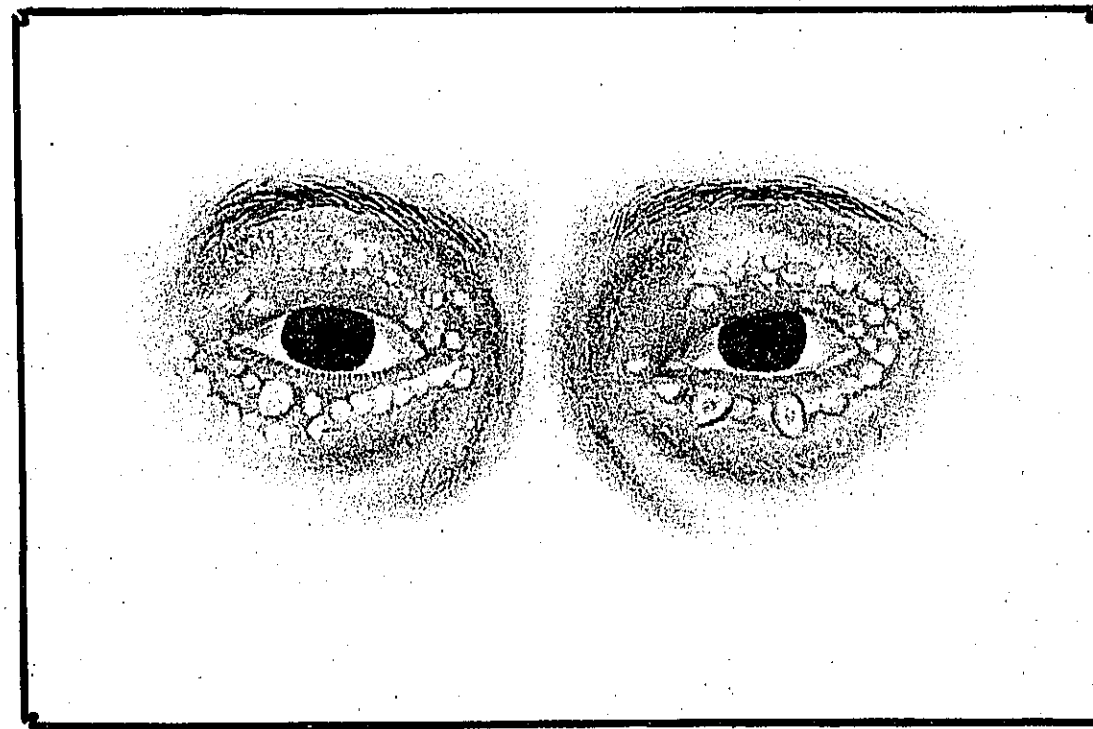
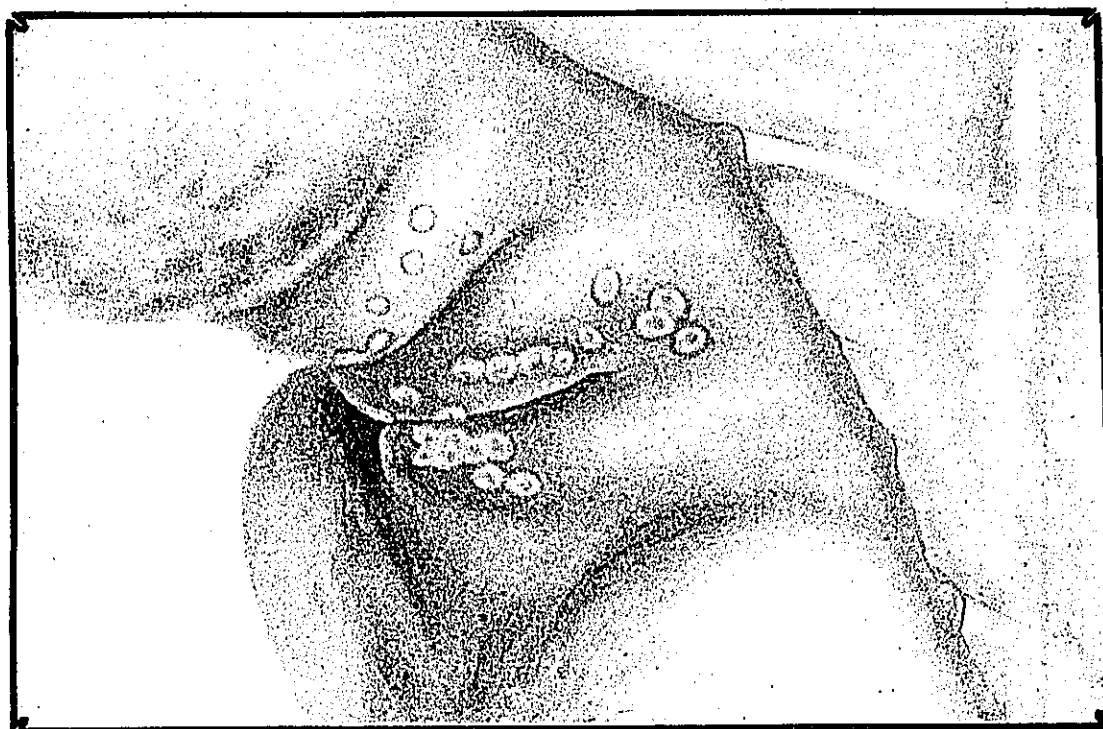
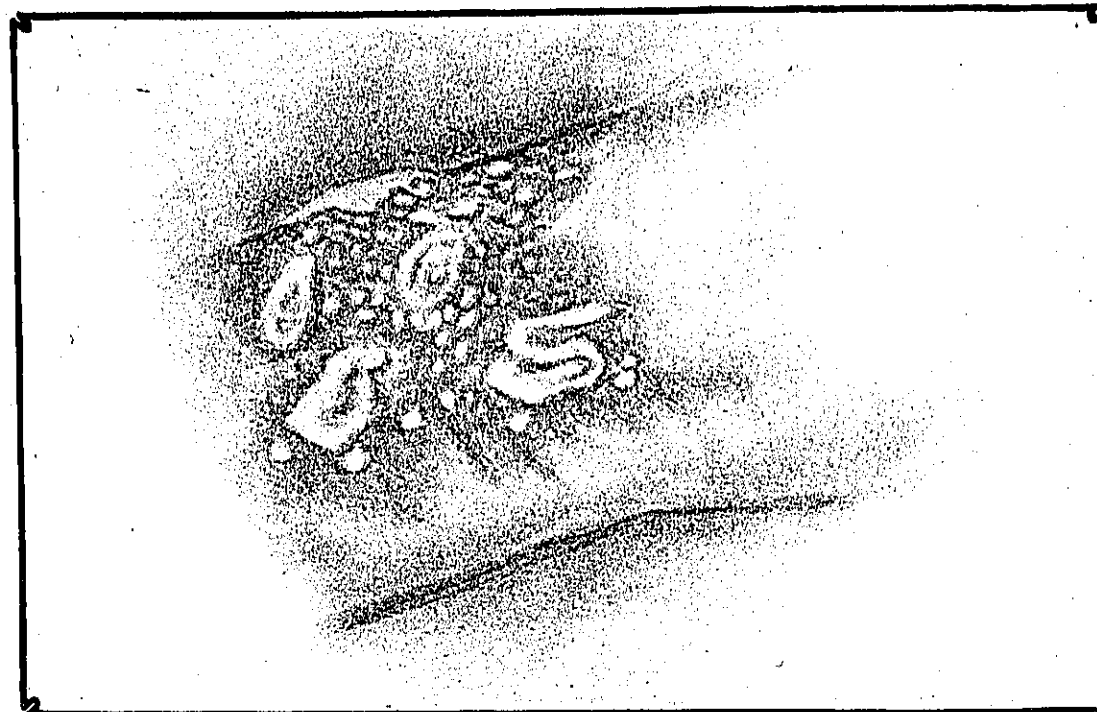
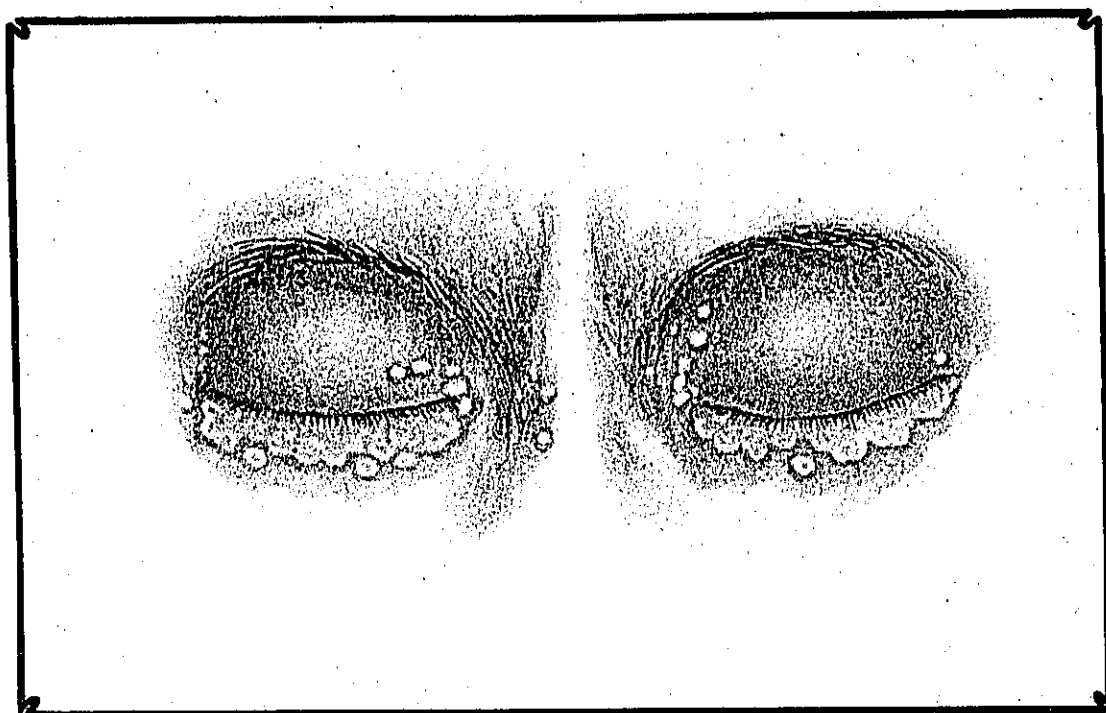
(4) 種痘性發疹(二次的痘疱) (Vaccine Secundaria)

痘疱ノ内容ガ直接他ノ部位ニ移植セララルコトニ依テ來ルモノニシテ必シモ稀ナラズ、本病ノ發生ハ通常被接種者自身ガ手指等ニ依リ痘疱ヲ摩擦搔爬シ、汚染セル手指ヲ以テ他部ヲ傷ケ之ヲ感染セシメタルモノニシテ、即チ自己接種ニ外ナラズ。

此種痘疹ノ發生ニハ搔爬ニ據ル皮膚ノ損傷ヲ必要トスルニ依リ、其ノ發生部位モ自ラ明ニシテ顔面頭

副 痘

(眼 瞼 其 他)



患 者 描 寫

宗 〇 サ
 第 一 圖 昭 和 三 年 二 月 十 三 日
 第 二 圖 全 上
 第 三 圖 全 上
 第 四 圖 昭 和 三 年 二 月 二 十 四 日

初 診 病 歷

昭 和 三 年 二 月 十 三 日
 種 痘 後 二 週 頃 ヨ リ 發 生 ス
 眼 瞼 發 赤 腫 脹 シ テ 開 眼 ス ル コ ト ヲ 得 ザ リ シ ガ 初 診 後
 十 一 日 目 ニ ハ 第 四 圖 ノ 如 ク 發 疹 著 シ ク 減 ジ 輕 度 ノ 癢
 痕 ヲ 殘 シ テ 治 癒 ニ 向 ヘ リ

(東 京 帝 國 大 學 醫 學 部 眼 科 學 教 室)

部、軀幹前面、上肢、陰部等ニ於テ屢々之ヲ見ルモ、背面上部ニハ殆ド之ヲ見ルコトナシ、而シテ此發疹ハ種痘後第十二日以後ニハ發生スルコトナシ、コレ此頃ニ至レバ種痘免疫ガ完成スルヲ以テ、假令痘毒ニ汚染セル手指ヲ以テ搔爬スルモ、病毒ヲ移植シテ、發痘ヲ生ズルコトナキヲ以テナリ、尙二次的痘疱ハ接種ニ依ル第一次的痘疱ヨリハ小ナルヲ常トシ、其ノ發育モ亦促進セララル。

種痘性發疹ノ一種ナル「眼險副痘」ハ一八七八年ヒルシユベルク Hirschberg 氏始メテ之ヲ報告シテ以來、經驗者少カラズ、我國ニ於テモ幾多文献ノ徵スベキモノアリテ、昭和三年（一九二八年）兼子周吉氏ハ濟生會病院麹町分院ニ於テ經驗セル女兒六歳ノ一例ヲ報告スルト共ニ、既往文献ノ二十一例ヲ加ヘテ統計的觀察ヲ試ミ、其ノ要旨トシテ左記ノ如ク記述セリ。

- (イ) 我國ニ於テハ自己感染多ク十四例ヲ算シ、他人ヨリノ感染ハ八例ナリ
- (ロ) 種痘ヨリ副痘マデノ發生日數ハ自己感染ニアリテハ四日乃至八日ニシテ、六日目最モ多キモ、他人ヨリノ感染ハ一般ニ週クシテ、一例ハ六日目ナリシガ他ハ何レモ十日以後ナリ
- (ハ) 好發部位ハ眼險緣ニシテ、誘因トシテ眼險緣炎ヲ有スルモノニ多シ
- (ニ) 角膜ヲ侵セルモノノ中ニハ潰瘍ヲ形成シ、穿孔スルニ至レルモノアリ
- (ホ) 經過早キハ一週普通ハ二週ヲ要ス

東京帝國大學醫學部眼科教室ニ於テモ昭和三年二月宗まさナル女兒ノ「眼險竝陰部副痘」ヲ診療シタリ、其ノ病狀ヲ模寫セルモノハ附圖ニ見ルガ如シ。

以上自己接種ノ方法ニ依ルノ外、受痘者ガ此感染方法ニ依リ他人ニモ亦感染セシムルコトアリ、是等ハ痘疱内容ヲ以テ汚染セル手指ニ依リ直接痘毒ヲ他人ニ移植スルノ外、他ノ媒介物例之衣類、浴水等ニ依リテ起ル場合モアリ。

(5)種痘性濕疹(Eccema Vaccinatum)

種痘性濕疹トハ多クハ濕疹ヲ有スル患者ガ第二次的ニ痘苗ヲ濕疹部ニ移植スルヲ云ヒ之ニハ(1)所謂自己接種ト(2)他人ノ受ケタル種痘ニ依リ痘毒ヲ濕疹部ニ移植セラルモノトノ二アリ而シテ其ノ感染ハ痘疱内容ヲ以テ汚サレタル手指ノ接觸ニ依ルコトアルモ其ノ他種々ノ原因例之種痘シタル小兒ト同衾スルコト殊ニ他ノ一方ガ皮膚病ヲ有セルコト又ハ共同ノ浴水ヲ用フルコト等ニ依ル場合アリ
ブロッホマン Blochmann 氏ハ一八八〇年ヨリ一九〇五年ニ至ル間ノ文献ノミニテモ一二〇例ヲ集メタルガ内五例ハ死ノ轉歸ヲ取リタル事實ニヨリ家族ニ濕疹患者アラバ種痘ヲ見合スベシ但シ天然痘流行時ニハ濕疹アルモ種痘ヲ受クルノ要アルニ依リ此際ハ濕疹ナキ部位ノ皮膚ニ一個又ハ二個ノ種痘ヲ爲シ且此上ニ保護綑帶ヲ爲スベシト云ヘリ。

パウル Paul 氏ニ從ヘバ痘毒ノ移植ガ始メテ其ノ徵候ヲ現ハスハ感染後三乃至四日ニシテ該部位ノ増悪ヲ認ム即チ乾燥セル濕疹ハ濕潤シ濕潤性ノモノハ其ノ發赤及腫脹ノ度ヲ増スベシ若シ顔面ノ濕疹ニ本症ヲ起ストキハ顔面ハ浮腫狀トナリ頸部淋巴腺腫脹シ感染部位ハ先ヅ汚穢灰白色又ハ蒼白トナリ次デ汚穢褐色ヲ呈シ漸次出血性トナル眞皮ノ露出部ハ次第ニ粗糙トナリ上皮組織缺損ノ爲ニ外觀蜂窠狀ヲ呈スルニ至ル。

濕疹ノ周邊及之ニ接スル健康皮膚部ニ於テハ無數ノ癒合性或ハ孤立性ノ膿疱ヲ形成シ膿疱ハ針頭大乃至五錢白銅貨大ニ達シ其ノ性狀ハ痘疱ト同一ナリ是等ノ痘疱ハ病變中心部ニ在ルモノ程相癒合シテ侵サレタル部分ノ中央ハ多クノ場合破壊シ脂肪様物質ニ被ハレタル潰瘍ヲ形成ス其ノ潰瘍ハ初メニハ透明黄色ノ惡臭アル液ヲ多量ニ分泌スルモ後ニハ黄色乃至暗褐色ノ痂皮ヲ以テ被ハレ經過良好ナル場合ニハ大凡通常ノ膿疱ト同様ノ經過ヲ取リテ治癒スルモ概シテ經過稍長キヲ常トス此病變ハ

強度ナルニ拘ラズ癢痕形成ハ比較的稀ナリ併シ顔面ニ於テハ種痘性濕疹後ニ明カナル癢痕ヲ貽スコト少カラズ。

此病變ハ決シテ本來ノ濕疹ノ範圍ヲ超ユルコトナシ而シテ濕疹ノ周圍ノ一見健康ナル皮膚中ニ孤立性膿疱ノ現ハルルコトアリ之ハ微細ナル皮膚ノ剝離ニ依ル自己感染ニ基クモノナリトス。

本症ニハ通常高熱ヲ伴ヒ其ノ強度及持續ハ局所病變ニ比例ス經過最モ不良ナル場合ニハ全身感染ノ徵ヲ呈シ體語意識混濁及急劇ナル心臓衰弱ノ爲ニ死ノ轉歸ヲトルコトアリ。

種痘性濕疹ハ時トシテ汎發性種痘疹ト合併スルコトアリ汎發性種痘疹ハ血行ニ依リ起ルモノト解釋スベキニ反シテ種痘性濕疹ハ接觸傳染ニ因ルモノト認メラル然レドモ極メテ稀ニハ全身性痘毒分佈ニ依リ濕疹中ニ痘毒感染ヲ呈スルコトアリト考ヘラルル場合アリ血行ニ依ル全身感染ニ於テハ定型的發疹ハ口腔及咽喉粘膜等ニモ現ハレ同時ニ濕疹ナキ健康皮膚ニモ痘疱ヲ形成シ脾腫及瀰蔓性氣管支炎ヲ伴フヲ特異トス。

【子ノ經驗例】

昭和三年二月ヨリ五月ニ至ル期間ニ於テ警視廳管内ニ痘瘡流行シ患者六十七名ヲ算シタリ此際管内民衆ニ種痘ヲ勸説シ受痘者三一三四人ヲ數ヘタルガ從テ異常經過ヲ取レルモノ亦尠カラザリキ其ノ中子ノ檢診シタル十數例中最モ甚シカリシ二例ヲ記載スレバ左ノ如シ。

(1)自己接種ノ例

北豊島郡三河島町一、二九一番地
とも私生兒

伊藤ふち子(六歳)

患兒ハ從前ヨリ後頭部、顔面、項部、胸部、腹部、四肢等ニ濕疹ヲ有セシガ、昭和三年三月二十九日左上膊ニ四個ノ種痘ヲ受ケ善感セリ、四月七日ニ至リ、全身ノ濕疹部ニ無數ノ定型的痘疱ヲ生ジ熱發三十九度ニ達シ一見天然痘ニ酷似ス、茲ニ於テ醫ノ診ヲ乞ヒ痘瘡トシテ届出アリタルモ、予ハ檢診ノ結果種痘性濕疹ト斷ジタリ、其ノ後數日ニシテ痘疱ハ乾燥落屑ニ至リタルガ、濕疹ハ尙數ヶ月存在セリ、十二月十日再ビ檢診セルニ濕疹モ殆ド治癒シ、痘瘡ノ跡ハ僅ニ色素脱失ヲ貽セルモ、癍痕ハ全ク之ヲ認メザリキ。

(2) 他人ヨリノ移植ヲ受ケタル例

北豊島郡西巢鴨町池袋一、一八一番地

義則次男

河野義和(二年)

患兒ハ未種痘兒ニシテ、昭和三年二月頃ヨリ頭部、顔面、頸部等ニ脂漏性濕疹アリテ醫療ヲ受ケツツアリシガ、三月二十八日母よし及姉つねノ二人何レモ種痘ヲ受ケ、よしハ六顆つねハ四顆初種痘ノ如ク善感シタリ、然ルニ四月八日ニ至リ患兒ノ濕疹部ニ施セル繃帶ヲ交換セントシタルニ左側頰部ニ於テ圓形ノ小疱數個發生セルヲ發見シ、十日ニ至リ右側頰部ヨリ頸部、胸部、胸骨部等ニ波及シ、恰モ天然痘瘡ノ如キ所見ヲ呈スルニ至レリ、主治醫ノ申告ニ基キ、十一日檢診ノ結果、種痘性濕疹ト診斷シ、念ノ爲種痘ヲ爲シタルモ全ク不善感ニ了リ、痘疹ハ普通ノ經過ヲトリ、間モナク治癒シタリ。

同年十二月十七日其ノ後ノ經過ヲ見ルニ濕疹ハ六、七月ノ頃治癒シ、痘疹ノ發生セル皮膚面ニハ僅ニ色素沈着ヲ貽セルノミ。

第四節 合併症

第一 創傷傳染

種痘ニ依リ數個ノ切創ヲ生ズルヲ以テ此創面ニヨリ一次的又ハ二次的ニ創傷傳染ヲ發スルコトアリ、一次的傳染トハ切種ノ操作ニ際シ感染ヲ來スモノニシテ、二次的傳染トハ其ノ後ニ於テ感染ヲ起セルモノヲ云フ、而シテ一次的感染ノ原因ヲ爲ス細菌ハ種痘刀或ハ痘苗内ニ存セルモノナルカ、又ハ被接種者ノ皮膚ニ附着セルモノナリトス。

次ニ二次的感染ハ接種直後、切創ガ新鮮ナル内ニ起ルカ、或ハ第八日目頃ニ膿疱ヲ形成セル際搔痒又ハ異常感覺ノ爲ニ、手指等ニテ搔爬シ、病毒ヲ擦入スルコトニ因リテ發ス。

是等ノ場合原因トナルモノハ主トシテ、葡萄狀球菌、連鎖狀球菌等ノ醗菌ニシテ、之ニ因スル異常經過ハ潰瘍性トナルカ、或ハ壞疽性トナリ、又時トシテハ丹毒、蜂窩織炎、敗血症等ヲ起スコトアリ。

(1) 膿疱ノ潰瘍ハ接種部位ヲ器械的ニ傷クルカ、又ハ化膿菌ノ感染ニ依リテ生ズルモノナリ、正常ノ經過ヲ取リ來リシ痘瘡モ、此感染ノ爲ニ乾燥期ニ移行セズシテ八日乃至十日頃ヨリ潰瘍ニ變ジ次第ニ其ノ廣

サ深サヲ増シ膿疱形成ノ極點ニアリテハ緊眼及ビ搔痒感最モ強度ニシテ被接種者ハ痘瘡ヲ搔爬スルヲ常トス、斯クシテ膿疱ノ外皮ハ破壊セラレ往々菌ノ感染ヲ招クコトアリ、一般ニ種痘潰瘍ハ緩慢ナル經過ヲ取ルヲ常トシ、次第ニ其ノ深サヲ増シ噴火口狀ノ物質欲損ヲ生ズルニ至リ、而シテ其ノ潰瘍ノ底

面ハ海綿狀ノ出血シ易キ肉芽ヲ以テ被ハレ、周邊ハ堤防狀ニ肥厚シテ發赤ヲ見ル、治癒ハ極メテ遅キモ次第ニ健康肉芽組織ヲ生ジ、大ナル物質缺損部ヲ胎シテ治癒シ楔狀不規則ナル深キ癩痕トナルカ、又ハ時トシテ硬結性ヲ帶ビタル癩痕ヲ胎ス。

(2) 潰瘍ニ續發シテ稀ニ皮膚ノ壞死ヲ來スコトアリ、此場合ニハ先ヅ潰瘍ヲ生ジ其ノ周邊ニ炎症性發赤ヲ呈シ廣サヲ増シ扁平ナル物質缺損ヲ來ス、潰瘍ノ底面ハ豚脂樣物質及壞死ニ陷レル組織片ニテ被ハレ間モナク其ノ大サヲ増シ五十錢銀貨大以上トナリ、且其ノ深サモ増シ屢々筋肉ヲ露出スルニ至ルコトアリ、而シテ斯ノ如キ症狀ハ通常衰弱セル榮養不良兒ニ見ル所ニシテ高熱ト衰弱ト下ニ一般ニ死ノ轉歸ヲトルモノナリ。

(3) 丹毒ハ接種技術ノ進歩ト痘苗改善トニ依リテ稀有トナレリ、之ヲ早發丹毒ト晚發丹毒トニ分チ前者ハ接種後二日目乃至四日目ニシテ起ルモノヲ云ヒ、後者ハ第五日以後ニ於テ起ルモノヲ云フ、早發丹毒ハ接種ト共ニ感染ヲ來セルモノニシテ晚發丹毒ハ痘疱ノ破壞ニ依リ二次的感染ヲ來セルモノナルモ臨床的ニハ何レモ普通ノ創傷丹毒ト何等異ナル所ナシ、乳兒ニ種痘丹毒ヲ見ル場合ハ豫後殆ド常ニ不良ナリ、是レ初生兒、乳兒ニアリテハ丹毒ガ頗ル重症ニ經過スルヲ以テナリ、但シ第二期種痘以後ニアリテハ之ニ反シ豫後遙ニ良好ナリトス、丹毒ガ接種後三日以内ニ來レル場合、即チ早發丹毒ニアリテハ其ノ診斷容易ナルモ第八日頃ニ於テハ鑑別稍々困難ナル場合アリ、即チ正常經過ニ於ケル「アレオーラー」ト誤マル恐アルノミナラズ、特ニ再種痘者ニアリテハ「アレオーラー」ガ相融合スル爲メ其ノ所見丹毒ニ酷似シ判定一層困難ナリ、但シ丹毒ニアリテハ通常其ノ發現ガ急性ナルコト、熱ノ急劇ナル上昇ヲ見ルコト、全身症狀及意識溷濁ヲ伴フコト、健康皮膚部トノ境界判然タルコト及治癒期ニ於テ落屑ヲ見ルコト等ノ特有ナル點アルヲ以テ之ニ依リ鑑別スルヲ要ス。

(4) 其ノ他二次的感染トシテ淋巴管炎ヲ發シ高度ノ腋窩腺腫脹或ハ時トシテ化膿性淋巴腺炎ヲ伴フコトアリ、又蜂窩織炎ヲ起シ之ニ續發シテ全身敗血症ヲ來スコトアリ、是等ハ何レモ稀有ニ屬スルモ接種部位ヲ不注意ニ又ハ不潔ニ放任スルコトニ依リテ來リ得ルモノトス。

以前人化痘苗ヲ使用シタル時代ニアリテハ種痘ニ依ル微毒ノ傳播ハ相當考慮ヲ要セシ處ナルモ、現今ノ如ク牛化人痘苗又ハ純牛痘苗等動物體ヨリ得タル痘苗ヲ使用スル場合ニハ斯ノ如キ危險絶無ナリト云フヲ得ベシ。

種痘ニ依リ結核ヲ移植スル可能性ハ種痘反對者ノ特ニ指摘スル所ナルモ、動物ヨリ得タル痘苗ヲ使用スル今日ニアリテハ殆ド絶無ト云フヲ得、是レ痘苗製造ニ利用セラルル種ハ每常獸醫學的検査ヲ受クルヲ以テナリ、又或製造所ニアリテハ痘苗採取ニ當リ動物ヲ屠殺シテ結核感染ノ有無ヲ確ムル所アリ、人痘苗ヲ使用セル時代ニアリテモ實際上種痘ニ依リテ結核ヲ感染セシメタル例ハ確實ナルモノナキガ如シ。

一九〇一年北米ニ於テ受痘兒ガ破傷風ヲ起セリト云フ數例ノ報告アリ、而シテ之ガ原因ハ痘苗ガ破傷風菌ヲ含有セシニ依ルモノト認メラルルモ、現今ハ痘苗ノ製造ニハ嚴重ナル細菌學的検査ヲ行ヒ且種種ナル殺菌法ヲ行フヲ以テ斯ノ如キ事實ハ殆ド杞憂ニ過ギザルベシ、此外寄生性匍行疹、傳染性膿痂疹等ガ接種ニ依リ感染ヲ來セリトノ報告ナキニアラザレドモ、今日ニアリテハ痘苗製造法ノ進歩ニ依リ最早是等ノ恐レナシ。

第二 種痘後腦炎

本病ハ一九二四年ルクシト Lukeshi 氏ガボヘミヤニ於テ種痘後ニ引續キ破傷風樣症狀即チ咬筋痙攣、後弓

反眼等ノ症候ノ下ニ遂ニ死亡セル三例ヲ報告シテ以來漸ク世ノ視聽ヲ惹キ殊ニ英蘭ウエールズ州並和蘭ニハ多數患者ノ發生アリテ續々報告セララルアリ、一九二八年八月ニハ國際聯盟保健部ニ於テ「國際痘瘡及種痘調査委員會」ノ席上之ニ關シテ論議セラレタルコトアリ、我國ニ於テハ未ダ其ノ適例之レナキガ如キモ將來ノ爲ニ其ノ概要ヲ記載スレバ左ノ如シ。

一文 獻

前記ルクシユ氏報告ノ三例中二例ハ四歳六歳ノ兄弟ニシテ第三例ハ他ノ家族ニ發生セル六年九ヶ月ノ小兒ナリ、是等ハ何レモ種痘後九日乃至十一日ニシテ腦症狀ヲ起シ、種痘後十五乃至十八日ニシテ死亡セリ、之ヲ剖檢セルニ内一例ノ腦ハ鏡檢ノ結果急性流行性腦炎ニ特異ナル所見ヲ呈セリト、又ルグシユ氏ハ種痘後八日ニシテ發病セル同症ニ遭遇セルガ患者ハ二人ノ小兒ニシテ何レモ死亡セリト云フ、瑞西ニ於テスチネル(Schäfer)氏ハ種痘後十日ニシテ腦症狀ヲ呈シ、漿液性腦膜炎ト診定セラレタル二例ヲ報告シ、ワルシャツエル(Warschauer)氏モ二歳ノ小兒ニ於テ同様ノ經驗ヲ爲シ、エーレ(Jehle)氏モウイーン市ニ於テ道般ノ一例ニ遭遇セリト云フ、一方和蘭ニ於テハ是等ト時ヲ同ウシテ、バスタアーンセ(Bastnause)氏ハ種痘後腦炎ノ三十五例ヲ報告シ、其ノ他ライネル(Leiner)氏ハウキーンニ於テ三例ヲ、英國ノウイニコット及ギンズ(Winnocot, Gibbs)氏和蘭ノブラツケン(Praiken)氏、ザツクセンノコツホ(Koch)氏、匈牙利ノコラー(Kollar)氏等ハ何レモ本症ノ一例ヲ經驗セリト云フ。

二英國及和蘭ニ於ケル流行概況

和蘭ニ於テハ一九二三乃至二七年ニ至ル五年間ニ種痘シタルモノ七五二六、六〇六人中種痘後發セル腦炎一三九例アリ内四一例ハ死亡セリト云ヒ、英蘭ウエールズ州ニ於テハ衛生大臣ノ指令ニ依リ開催セル「アンドリニス」及「ロールストン」兩委員會ノ調査セル所ニ依レバ一九二二年十一月十四日ヨリ一九二三年十一月一日ニ至ル間ニ六二例ノ患者アリ、内三六例ハ死亡シ、又一九二六年一月一日ヨリ一九二七年九月三十日マデノ間ニ患者二五例アリ、中一二例ハ死亡セリト報告セリ。

三症 狀

潜伏期ハ「ロールストン」委員會ガ九四例ニ就キ調査セル所ニ依レバ、種痘接種後九日乃至十三日ニシテ發病シ、平均十一日ナリト云フ、年齢ハ本病ガ初種痘ニ關係スル爲カ和蘭ニ於テハ三歳乃至六歳ノ小兒ニ多ク、英國ニ於テ學齡兒童ニ多シ、但シ何レニ於テモ幼兒ニハ稀ニシテ大人ニハ絶無ナリト云フ。臨床的ニハ突然頭痛、嘔吐、發熱等ノ前驅症狀アリ、次テ痙攣ヲ發シ嗜眠ニ陥リ、ケルニツヒ氏症狀、バビンスキー氏症狀陽性ナル等大體ニ於テ流行性腦炎ニ酷似スルモ、又多少ノ相違アリ、後麻痺ハ恢復期ニ於テ之ヲ見ルモ漸次消退スルコト多シ、此際種痘ハ正常ノ經過ヲ取ルヲ常トス、本病ノ經過ハ種々ニシテ輕キハ一週ヲ出デズシテ輕快ニ赴クコトアルモ、中ニハ敗血症ヲ起シテ死亡スルモノモアリ、死亡率ハ四〇乃至五〇%ナリト云フ。

四種痘トノ關係

本症ハ前記ノ如ク種痘後九日乃至十三日ニ來ルモノナルガ、發病者ノ種痘反應ハ必シモ強烈ナラズシテ種痘ハ多クハ正常ノ經過ヲ取リテ善感スルコト多シト云フ、又痘苗トノ關係ニ就キテ國際聯盟ノ報告ニ依ルモ本症ハ痘苗ノ種類及種痘ノ手技等ニハ何等ノ關係ヲ認メズト云フ、唯ライネル及ネツタル(Leiner, Netter)氏ハ牛痘ノ毒ガ強力ナリシガ爲ナリト云ヘリ。

五病理解剖

病理解剖上ノ所見トシテハ、所謂軟腦膜炎型ニシテ末期ニハ浮腫ヲ呈シ、急性散在性硬化ノ所見ト類似セリ、又最重症ノ場合ニ於テハ腦實質内ニ痘瘡毒ヲ證明シ得ベシト、其ノ他腦脊髄液ハ無菌ニシテ何等

特別ノ變化ナキモ或ル例ニアリテハ「クロール」化合物ノ量著シク多ク又含糖量ノ増加著シキ場合アリト云フ。

六、本體ニ關スル考察

本症ニ關シ偶然腦炎ガ種痘ニ併發セルモノナリトノ説ハ多數學者ノ否定スル所ニシテ其ノ理由ハ同一場所ニ於テ他ニ同様ノ腦疾患ヲ見ザルコト又全ク國ヲ異ニシテ何レモ種痘後八日乃至十二日ニシテ多數ノ症例ヲ報告セラルルコト等此説ニ有利ナル點ナリトス而シテ病原ニ對スル見解ハ諸家ノ説未ダ一致セズ現今論議セラルル重大ナル點ハ大體次ノ如ク三説ニ岐ルルガ如シ。

- (イ) セツシユ氏ノ如キ發病ニ對シ素質ヲ與フルニ過ギズトスルモノ、
 - (ロ) 腦炎ノ病原ガ痘苗中ニ含まレ居レリトスルモノ、
 - (ハ) 痘毒夫レ自身ガ腦炎ヲ惹起セシメ得ベシトスルモノ、
- 是等ノ問題ヲ解決セシトシテ各所ニ於テ動物試驗ヲ試ミタルモノアリ即チパスチヤンセークラウス *Kraus* 及高木(逸) ライネル氏等ガ家兎ニ患者ノ腦實質腦脊髓液及恢復期患者ノ血清等ヲ接種セル實驗ハ何レモ陰性ニ了レリ又組織學的ニ檢スルモ痘毒感染ニ特異ナルグワルニエリー氏小體ヲ發見セルモノナシ但シ是等陰性所見ニ對シルクシユ氏ハ牛痘ヲ接種セル家兎ニ於テ陽性所見ナキノ故ヲ以テ本症ノ發見ガ痘毒感染ニ依ルニアラズト否定スベキ論據タラズト云ヘリ氏ハ又或ル場合ノ實驗ニ於テ痘苗ヲ家兎角膜ニ接種シ致死的ノ腦炎ヲ生ゼシムルヲ得タリ而シテ此實驗ハ臨床的及解剖的ニ「ヘルペス」病毒ニ依リ惹起セシメタル病症ト全ク一致シタリト云フ氏ハ又流行性腦炎ノ病毒ト「ヘルペス」病毒トハ同一ナルベキヲ想像シ且痘毒ハ明ニ腦炎ヲ起シ得ルモノナリト結論セルガライネル氏及ギンズ *Gins* 氏ハ此ノ説ニ贊成シ且ライネル氏ハ「ワクチーナゲネラリザーター」(汎發性種痘疹)ト腦炎ガ同

時ニ併發シ來ルコトヲ附記セリ然レドモ痘毒ガ偶然腦炎若ハ「ヘルペス」病毒ヲ混有スベシトハ殆ド想像シ得ラレザルコトナリトス何トナレバ多數接種ノ場合ニ於テモ腦炎ノ例ハ極メテ稀ニ見ラルルヲ以テナリギーセ *Giese* 氏ニ依レバ「ヘルペス」病毒ガ偶然種痘ニ認メラレシ例ナク「ヘルツベルグ *Herzberg* 氏」ニ依ルモ「ヘルペス」病毒及「ヘルペス」腦炎病毒ハ種痘ノ皮膚ニ於テ増殖セザルコト明カナリ從テ研究者ガ病毒ヲ種痘ニ移植スルコトヲ得ベシトノ推定ハ何等ノ根據ナシト云フモ可ナリ學界ノ趨勢以上ノ如クナルヲ以テ吾人ガ最モ合理的ナリト考ヘラルルモノハ「種痘ガ偶々本病ヲ誘發スルモノナルベシト」ノ假説ニシテ例之結核性腦膜炎ノ如キモノニ於テ斯ル例ヲ見ルコトアルハ何人モ既知ノ事實ナリトス又種痘ト神經系統ハ關係ヲ有スルコトハ例之家兎ノ腦内又ハ角膜ニ牛痘ヲ接種シテ腦炎ヲ惹起セシメ得ルノ事實ニ見ルモ明カナリトス又パスチヤンセー氏モ本病ノ本體究明ニ關シ各種ノ實驗ヲ行ヒタリシモ其ノ成績陰性ニ了レル結果種痘接種ガ偶然體內ニ存スル腦炎病毒ノ附着點ヲ與フルモノナルベシトノ説ヲ樹テクラウス及高木氏ハ此説ニ贊セリ同氏等ハ種痘後腦脊髓膜炎ノ症狀ヲ呈シ治癒セル小兒ノ血清ニ就キ補體結合反應ヲ試ミレバ「レバチー *Levadit* 氏」ノ腦炎病毒「ヘルペス」病毒及種痘後腦炎ノ腦トハ反應陽性ナリシモウキーン市ニテ得タル牛痘トハ陰性ナリシヲ見又腦炎患者ノ血清モ全ク之ト同シ結果ヲ呈シタルヲ以テ同氏等ハ接種材料ガ腦炎ノ病原的因子ヲ有スルコトヲ否定セル等誘發説ヲ支持スルモノ尠カラズ。

七、對策

種痘後腦炎ノ豫防トシテ今日マデニ擧ゲラレタル所ハ(1)痘苗ヲ弱毒ノモノトスルコト(2)痘苗ヲ少量宛數回ニ亘リテ接種スルコト(3)種痘技術ヲ改良スルコト等ナルガ原因本體等ノ闡明セザル今日到底的確ナルモノヲ捕捉シ得ザルガ如シ。

第三 脊髓前角炎

一九〇八年種痘後發生セル脊髓前角炎三例ノ報告アリ就中一例ニテハ麻痺ハ接種後數時間ニ發生セリト次デ一九〇九年ニモ斯ノ如キ報告アリ、ホツホハツス Hoohaus 氏ハ初種痘兒ニ於テ種痘後一日トレンメル Trummer 氏ハ同ジク三日ニシテ發症セルヲ見ツエルニ一及オービッツ Czerny, Opitz 氏ハ六日ニシテ發病セル一例ヲ見タルモ、其ノ例ハ確實ナル前角炎ナラザリキ、併シ同氏等ノ見タル例ニシテ確實ナル二例ハ種痘後四週及十週ニシテ發病セリ、斯ノ如ク非常ニ早期ニ起リ又ハ長時日ヲ經テ起ル點ヨリ見レバ本症ガ種痘ト確ニ關係アリトノ說ニハ疑ナキ能ハズ、何トナレバ元來本病ノ潜伏期ハ通常三日乃至十日ナレバナリ、故ニチエルニ一及オービッツ Groth 氏等ハ本病ト種痘トノ關係ヲ否定セリ、併シナガラトムセン (Thomsen) 氏ノ實驗ハ興味アルモノニシテ、氏ハ猿ニ對シ本病患者ノ脊髓ヲ接種シ、之ト同時ニ痘毒ヲ皮膚ニ接種セルモノニ限り前角炎ニ罹患セシメ得ルコトヲ實驗セリ、從テ氏ハ種痘ニ依リ素質ガ與ヘラルルモノニアラズシテ、前角炎病原體ガ接種膿疱内ニ増殖スルモノト信シタリ。

第四 結核性腦膜炎

種痘ト結核性腦膜炎トハ同時ニ來リ得ルカ、或ハ相次デ來ルモノナルカハ明ニ區別シ難キコトアリ、然レドモ種痘後腦膜炎ノ發生スルコトハ必シモ稀ナラズシテ一九〇四乃至六年ニ報告セラレタル本症ノ四例アリ、又一九一一年ニハ六例アリ、中一例ハ再種痘兒ノ報告ナリト、ブオクト Vost 氏ハ一八九三乃至一九〇二年ノ間ニ於テ初種痘及再種痘者三五四〇〇〇人中恐ラク結核性ト思ハルル腦膜炎ノ四例ヲ見タル

ガ是等ハ種痘後六乃至十六日及二十七日ニ死亡シ、氏ハ種痘ガ本症ヲ誘發スルモノニアラズシテ増悪セシムル原因タルベキヲ想像セリ、チエルニ一及オービッツ 氏等ハ腦膜炎ノ多數ヲ經驗シタルガ、明カニ結核性ナリト考ヘタルハ八例ナリト云ヘリ、是等ハ何レモ初種痘兒ニシテ種痘後六、十二、十四、十七、二十四、二十六、二十七日目ニ死亡セリ、内最初ノ二例ハ種痘後死亡時期餘リニ短キガ故ニ關係ナキガ如キモ、其ノ他ノモノハ全然之ヲ否定スルコト能ハズト主張セリ。

第五 麻痺狂

最近ニ於テ二三ノ學者ハ麻痺狂ト種痘トノ間ニ關係アルコトヲ指摘セリ、サロモン Salomon 及コルブ Kolb 氏ハ兩者ノ間ニ關係ナシトナセルモ、一九二五年ダラスキトウキッツ Danaskiewicz 氏ノ如キハ關係アルコトヲ主張セリ、其ノ根據トスル所ハ麻痺狂ハ種痘ノ創始後始メテ見ラルル所ニシテ、殊ニ種痘ノ普及セル文明民族ニ多ク、又一回以上種痘シタルモノニ來リ殊ニ軍人ノ如ク數回ノ種痘ヲ受ケタルモノニ特ニ頻發スルト云フニアリ、而シテ斯ノ如キ素質ハ牛痘接種ニヨリテノミ見ラレ、天然痘經過ノ場合ニハ寧ロ之ニ反シ罹患率少ナシト云ヘリ、如何トナレバ麻痺狂患者ハ總テ種痘ノ癍痕ヲ有スルニ反シ天然痘ノ癍痕ヲ貽セルモノニ認メザレバナリ、從テ天然痘ハ明カニ熱療法ノ意味ニ作用シタルモノト考ヘラルト云ヘリ、然レドモ一方ニハ氏等ノ說ニ反對意見ヲ有スル者多數アリ、例ヘバアインジール Enstedal、ガレウスキ Galowsky、イムスルヒ Berg、クレムリン Krapelin、ノンネ Nonne、ウキルマンズ Williams、ラウト及ヤーネル Plant u. Jahnel、シユクレー及クリム Schikre u. Keim 氏等ニシテ、コルブ 氏ノ如キハダラスキトウキッツ 氏ノ說ハ種痘ノ施行ニ妨害ヲ與フルモノナリトノ警告ヲ與ヘタリ。

第六 急性傳染病トノ合併

種痘ノ經過中ハ他ノ急性傳染病ニ感染發病スルコトアルモ何等ノ影響ヲ受クルコトナク又之ニ反シ種痘ガ偶發セル傳染病ノ經過ヲ増悪セシムルコトナシ但シコスマン Kossmann 氏ノ如キ反種痘論者ハ或種ノ傳染性疾患殊ニ腸チフス「コレラ」麻疹等ニ對シ種痘ハ甚シク死亡率ヲ増加セシムベシト論ジフオクト氏ニ依レバ「チフテリア」ガ種痘ニ併發セル場合ニアリテハ症狀増悪スルコトアリ又麻疹合併ノ際ニハ種痘ノ膿疱ノ治癒ガ稍々遅延スルコトアリト論ゼリ其ノ他エチルスキー Leiteski 氏ハ痘瘡患者發生ノ爲メ二十二名ノ猩紅熱患者ニ種痘ノ必要ヲ感ジタル場合ニ於テ内十一名ハ多少ノ障碍ヲ蒙レルヲ見其ノ一部ハ種痘ニ由ル結果ト推定セラルト報告セリ但シ一般ニ種痘ハ傳染病ノ經過ニ惡影響ヲ與ヘズ又反對ニ是等ノ傳染病ハ種痘ノ經過ニ影響ヲ與フルコトナシト信ゼラル。

東京市駒込病院大阪市桃山病院ヲ始メ道種ノ傳染病院ニ於テハ從來痘瘡患者ヲ入院セシメタル場合他ノ病症ニ依リ收容中ノ在院患者ニ對シ種痘ヲ爲シツツアリ左記ノ二表ハ上記ノ病院ニ於テ入院患者ニ對シ種痘ヲ施行シタル成績ニシテ以テ種痘ト傳染性疾患トノ關係ヲ知り得ベシ。

第一表

大正十三年東京市ニ痘瘡流行ノ際東京市駒込病院ニ於テハ入院セル各種傳染病患者六百八十二名ニ對シ一齊ニ種痘ヲ施行シタルヲ野口櫻井兩氏ガ其ノ成績ヲ觀察シテ發表シタルモノニシテ種痘善感ノ成績ハ病種及熱ノ有無並ニ病症ノ輕重ニ依リ大ナル差異ヲ生ゼザルガ如シ。

(甲) 病症別年齡別經過別種痘善感成績

病名	年齡別	有熱			無熱			恢復期		
		接種人員	善感人員	善感率	接種人員	善感人員	善感率	接種人員	善感人員	善感率
腸チフス	十歲以下	三五	二二	66.7%	一一	一〇	90.9%	二二	一九	86.4%
	十一歲以上五十歲以下	三一	一五	48.4%	一〇	一〇	100%	一〇	八	80%
	五十一歲以上	二三	一〇	43.5%	一〇	六	60%	一〇	六	60%
赤痢	十歲以下	一	一	100%	一	一	100%	一	一	100%
	十一歲以上五十歲以下	三	三	100%	一	一	100%	一	一	100%
	五十一歲以上	一	一	100%	一	一	100%	一	一	100%
チフテリア	十歲以下	一	一	100%	一	一	100%	一	一	100%
	十一歲以上	一	一	100%	一	一	100%	一	一	100%
猩紅熱	十歲以下	三	二	66.7%	一	一	100%	一	一	100%
	十一歲以上	一	一	100%	一	一	100%	一	一	100%
計		四〇七	二〇九	51.3%	二七	一五	55.6%	二七	一五	55.6%

(乙) 病症ノ輕重ニ依ル種痘善感成績

病症	重症			中等			輕症		
	接種人員	善感人員	善感率	接種人員	善感人員	善感率	接種人員	善感人員	善感率
腸チフス	一六〇	八六	53.75%	一〇五	四八	45.71%	三三〇	一七六	53.33%
赤痢	一	一	100%	一	一	100%	一	一	100%
チフテリア	九	六	66.6%	三	三	100%	一九	一二	63.16%
猩紅熱	二	一	50%	一	一	100%	二	二	100%
計	一七三	九二	53.18%	一一一	五五	49.55%	三八八	二一七	55.93%

第二表